18. ヨシガモ *Anas falcata*, Falcated Teal

形態　全長約48cm。雄は頭部が赤紫色で、目から後頭にかけて緑色。後頭に房状の冠羽があり、ナポレオンの帽子によく例えられる。体は全体に灰色。下尾筒の両脇には黄色い三角形の斑がある。三列風切は鎌形に伸び、尾の両側に垂れ下がる。嘴は黒、足は灰褐色。雌は全体に褐色で黒い斑がある。

分布　モンゴル北東部・中国東北部・ロシア沿海州・サハリン・千島・日本で繁殖し、朝鮮半島・中国・日本で越冬する。日本では北海道で繁殖するほか、冬鳥として全国に渡来する。

生態　湖沼・内湾・河川などにすむ。他の習性は他のカモ類に似る。

回収記録　移動回収記録46例のうち50km以上離れた回収は34例で、このうち国内放鳥外国回収は29例、国内放鳥国内回収は５例であった。国内放鳥外国回収はカムチャツカとハバロフスク周辺の沿岸域に集中しており、高緯度地方からは得られていなかった。国内放鳥国内回収は５例とも千葉県市川市および埼玉県越谷市の宮内庁鴨場で放鳥されたもので、宮城県回収の１例を除き、いずれも関東地方からの回収であった。

新放鳥数		927	羽
回収内訳	回収総数	移動回収	
国内放鳥国内回収	20	17(5)	
国内放鳥外国回収	29	29(29)	
外国放鳥国内回収			
外国放鳥外国回収			
計	49	46(34)	
移動回収率		4.96	%
最長移動距離		3,466	km
最長回収期間		4,251	日

図3.18　ヨシガモ *Anas falcata* の回収記録

19. ヒドリガモ　*Anas panelope,*　Wigeon

形態　全長約48cm。雄は頭部と頸が赤茶色で、額から頭頂にかけてクリーム色。目の後ろと後頭が緑色光沢を帯びる個体もいる。胸はブドウ褐色。腹・脇・背は灰色と黒の細かい虫食い斑で、尾と下尾筒は黒い。雨覆は白く、飛翔時には内側次列風切につながる白色部となって目立つほか、静止時にも体側の白斑となって見える（周りの羽に隠れて見えないこともある）。嘴は青灰色で先端が黒く、足は灰黒色。雌は全体に褐色で、赤みの強い個体や灰色味の強い個体がある。

分布　ユーラシアの寒帯で繁殖し、冬はヨーロッパ南西部・アフリカ北部・インド・東南アジア・中国南部・日本に渡る。日本では冬鳥として全国に渡来する。

生態　湖沼・河川・海岸などにすむ。植物質を好み、アマモ・海藻・藻類などを食べる。

回収記録　移動回収記録357例のうち50km以上離れた回収は280例あり、このうち国内放鳥外国回収が195例、国内放鳥国内回収は85例であった。

新放鳥数		9,931	羽
回収内訳	回収総数	移動回収	
国内放鳥国内回収	209	162(85)	
国内放鳥外国回収	195	195(195)	
外国放鳥国内回収			
外国放鳥外国回収			
計	404	357(280)	
移動回収率		3.59	%
最長移動距離		8,225	km
最長回収期間		6,258	日

国内放鳥外国回収

国内放鳥外国回収はアメリカ合衆国からの１例を除きすべてロシア東部からの記録であった。特にサハリン・カムチャツカ方面で多く回収されていた。

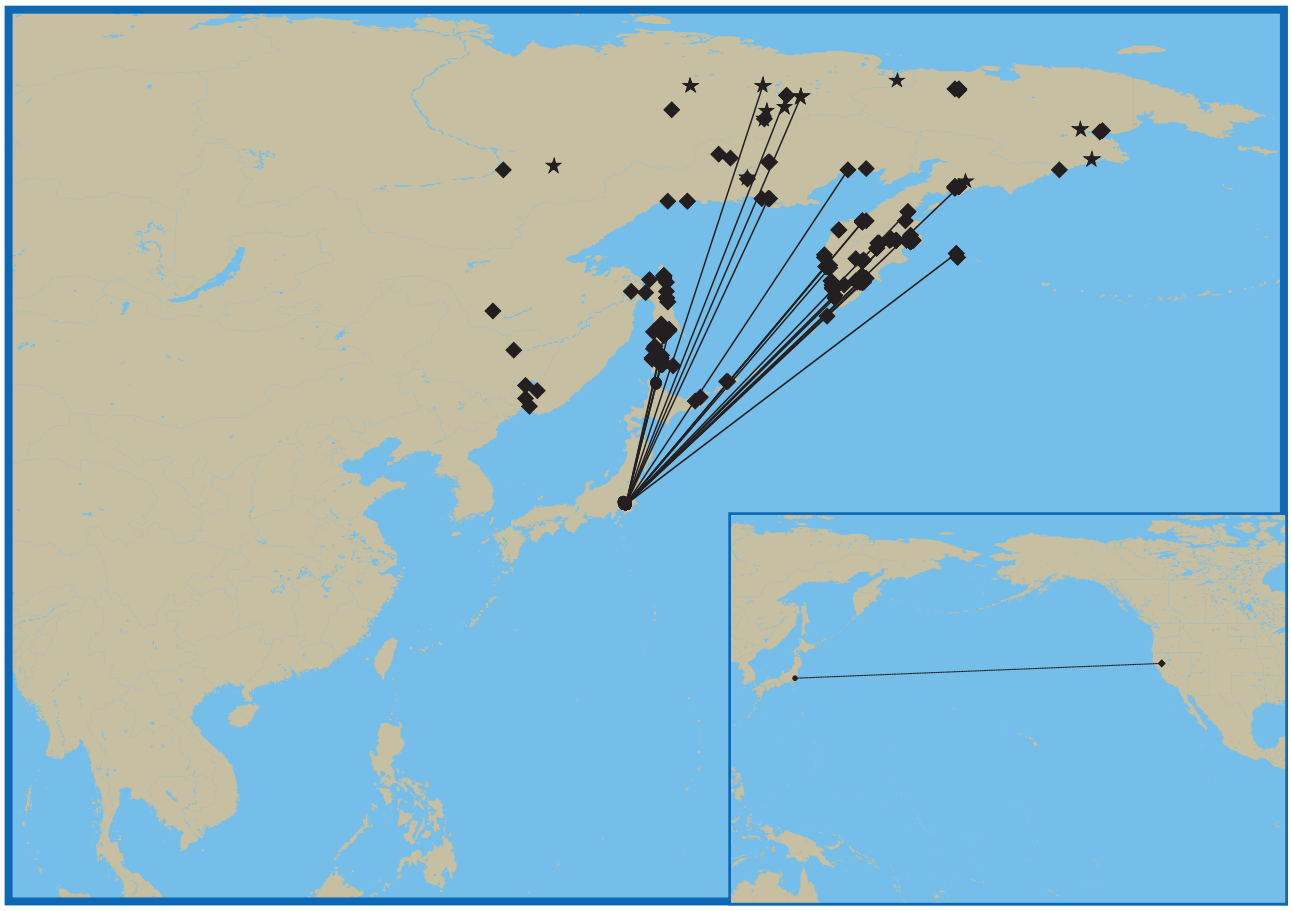


図3.19a　ヒドリガモ *Anas panelope* の国内放鳥外国回収

国内放鳥国内回収

50km以上離れた回収記録85例のうち、16例が短期間回収であった。このうち、北海道放鳥の３例は栃木県で１例・愛知県で２例、関東放鳥の12例は関東で７例回収されたほか北海道・宮城県・静岡県・愛知県・広島県でそれぞれ１例、福岡県放鳥の１例は宮崎県で回収されていた。

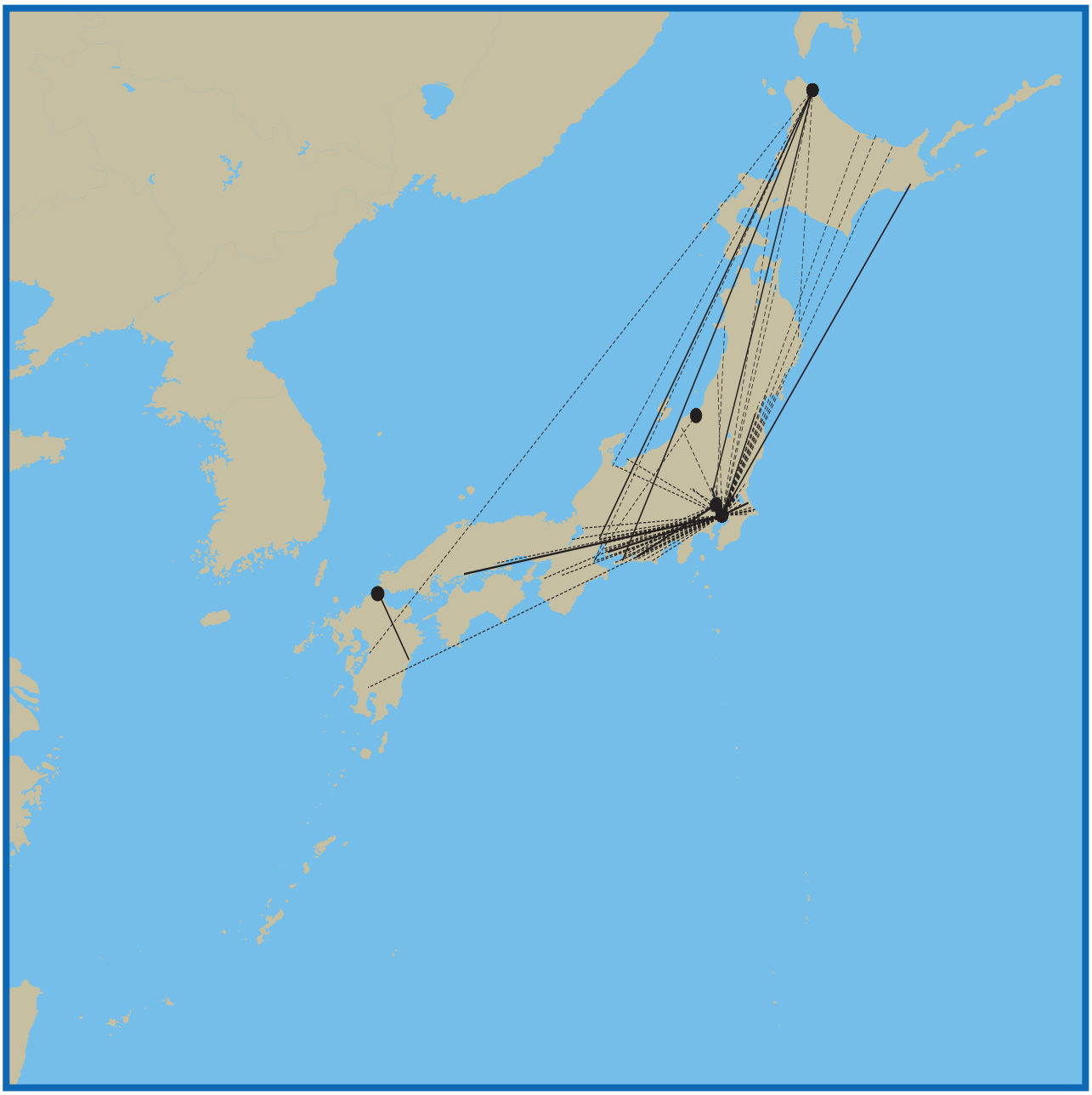


図3.19b　ヒドリガモ *Anas panelope* の国内放鳥国内回収

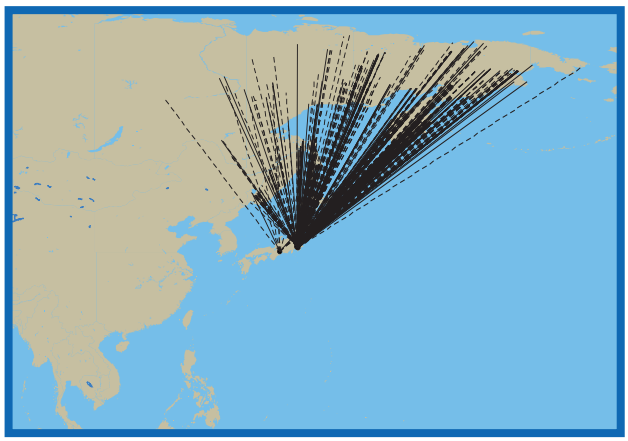
20. オナガガモ　*Anas acuta*,　Pintail

形態　全長雄約75cm、雌約53cm。カモ類としては頸が長い。雄は頭部と後頸が黒褐色で、前頸と胸は白い。背と脇は灰色、中央尾羽は黒くて細長い。下尾筒は黒く、前に黄色い斑がある。嘴は黒くて両側が青灰色、足は灰黒色。雌は全体に褐色で、黒褐色の斑がある。尾は雄よりも短い。嘴は全体に黒い。
分布　ユーラシアの寒帯・北アメリカ北部で繁殖し、冬はユーラシアおよび北アメリカの温帯から熱帯・アフリカ北部に渡る。日本では冬鳥として全国に渡来する。
生態　湖沼・河川・内湾などにすむ。他の習性は他のカモ類と同じ。
回収記録　本種の回収は例数が多いため、国内放鳥外国回収を５枚・外国放鳥国内回収を１枚・国内放鳥国内回収を２枚の図にそれぞれ示した。

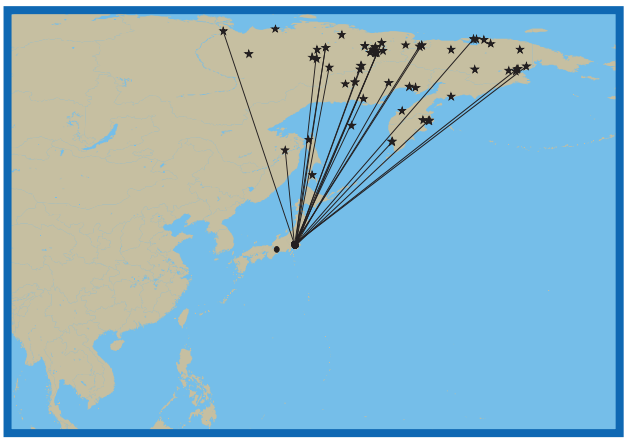
新放鳥数		66,363　羽
回収内訳	回収総数	移動回収
国内放鳥国内回収	4,542	4,426（　666）
国内放鳥外国回収	1,188	1,188（1,188）
外国放鳥国内回収	20	20（　20）
外国放鳥外国回収	1	1（　1）
計	5,751	4,635（1,875）
移動回収率		8.46　%
最長移動距離		9,856　km
最長回収期間		5,701　日

国内放鳥外国回収・外国放鳥国内回収

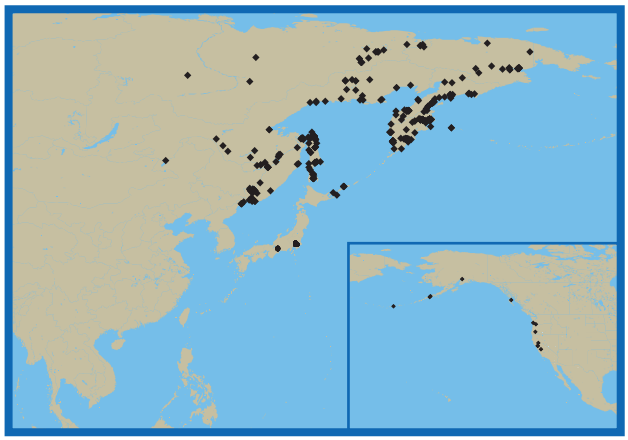
50kmを超える国内放鳥外国回収は1,188例と多数であるため、回収月不明の例を除いた1,166例を、回収月により便宜的に春期（３～５月、686例）・繁殖期（６～８月、71例）・秋期（９～11月、390例）・越冬期（12～２月、19例）に分けて図示した。



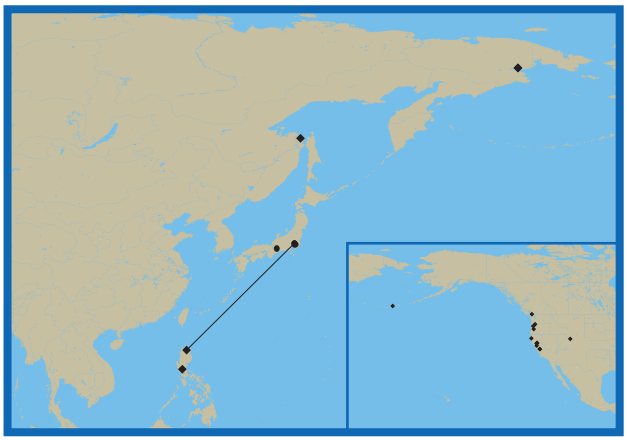
春回収（例数が多いため回収地の記号はなし）



繁殖期回収



秋回収



冬回収

図3.20a　オナガガモ *Anas acuta* の国内放鳥外国回収

繁殖期の回収例は春・秋期に比べロシアの北東部にやや偏る傾向が認められた。また、カナダ・アメリカ合衆国からの回収は１例も得られなかった。本種は北半球北部の広い範囲で繁殖することが知られているが、日本に越冬に飛来する個体群はロシア北東部で繁殖するものがほとんどであると考えられた。

春期と秋期の回収地は似たような傾向を示し、ロシア東端からマガダン・カムチャツカを経てサハリン・ヤクート東部・ハバロフスク地方周辺まで広く分布していた。カナダ・アメリカ合衆国からの回収では、春期はアラスカ州東部に限られていたが、秋期はアラスカ州からカリフォルニア州にかけての東海岸で回収された（図3.20a）。また秋期にはユーラシア西部からの回収が数例得られた。中でもウクライナ共和国からの回収は東経29°からで、日本における国内放鳥外国回収のうち最も西からの回収記録であり、移動距離は8,414kmであった（図3.20b）。

越冬期の回収はロシアからはわずかに３例（うち２例は同一場所）あるだけで、ほとんどの個体は越冬のため南へ移動していると考えられた。カナダ・アメリカ合衆国からは14例が得られ、多くはカリフォルニア州等中緯度の東海岸で回収されていた。この越冬期の記録により、年によって日本からカナダ・アメリカ合衆国へと越冬地を変える個体があることが明らかになった。また、日本で放鳥され、さらに南のフィリピンで回収された記録が２例得られた。とりわけ、１例は11月に埼玉県越谷市で放鳥され、わずか７日後に2,644km離れたルソン島で回収された。この個体は平均で１日に381km移動したことになる（図3.20a）。

外国放鳥国内回収の記録は、アメリカ合衆国の中央部で放鳥された記録が多く含まれており、このことから日本で越冬するオナガガモの一部は年によってアメリカ合衆国の東海岸だけでなく、中部でも越冬することがあると考えられる（図3.20c）。

図3.20b　オナガガモ *Anas acuta* の国内放鳥外国回収（西部回収）

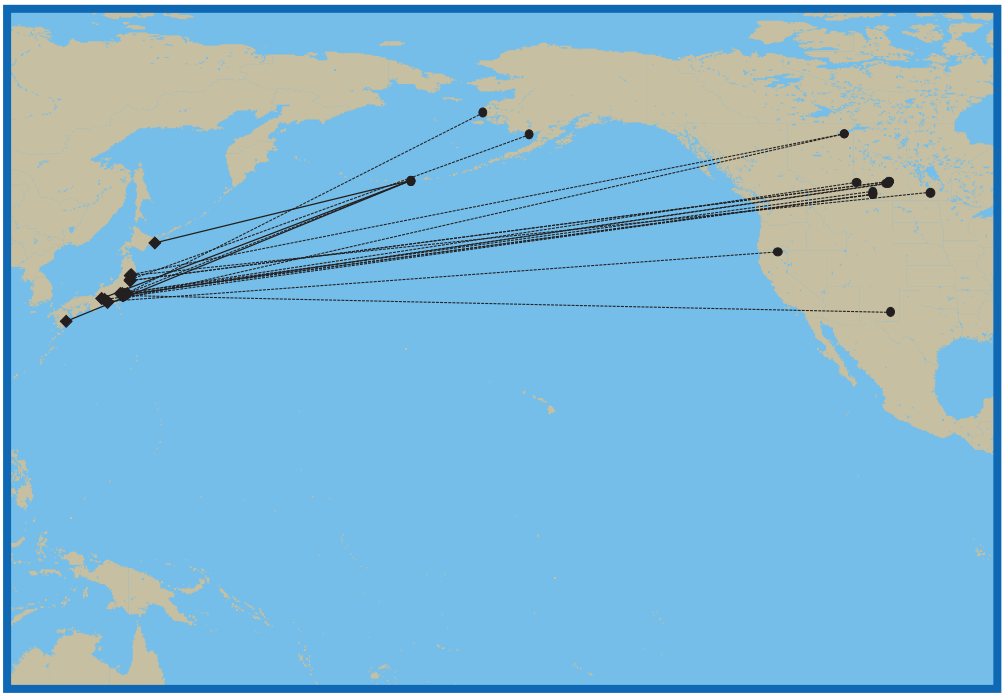


図3.20c　オナガガモ *Anas acuta* の外国放鳥国内回収

国内放鳥国内回収

例数が多いため、短期間回収186例とそれ以外480例に分けて図示した。短期間回収ではほとんどが関東地方で放鳥され、多くが関東地方で回収されたほか、宮城県でも多かった。また新潟県や山形県でも多くの回収が得られ、同一シーズン内に太平洋側から日本海側へ移動する個体がまれでないことが明らかになった。なお、北海道と近畿以西からは短期間回収はなかった。

一方、短期間以外の回収ではやはり大多数が関東で放鳥されており、回収地は北海道から中国・四国・九州地方まで広い範囲にわたっていた。

図3.20d　オナガガモ *Anas acuta* の
国内放鳥国内回収（短期間回収）

図3.20e　オナガガモ *Anas acuta* の
国内放鳥国内回収（短期間回収以外）

21. ハシビロガモ *Anas clypeata*, Shoveler

形態　全長50cm。幅広くて長い嘴が特徴。雄は頭部が暗緑色で、胸から脇は白く、腹は栗色。背は黒く、尾筒もともに黒い。雨覆は青灰色で、飛翔時に目立つ。嘴は黒く、虹彩は黄色。足はオレンジ色。雌は全体に褐色で黒褐色の斑があり、雨覆は灰色。嘴は黒みが弱く、オレンジ色を帯びる。虹彩は褐色。

分布　ユーラシア北部・北アメリカ北部で繁殖し、冬は南ヨーロッパ・北アメリカ・インド・東南アジア・中国南部・日本・北アメリカ南部に渡る。日本では少数が北海道で繁殖するが、大部分は冬鳥として全国に渡来する。

生態　湖沼・河川・干潟などにすむ。水生昆虫の幼虫・鞘翅目および半翅目の昆虫類・ウキクサなどを食べる。嘴の先端を開いたまま泳ぎ周り、水面の微少な生物をこしとる。

回収記録　移動回収記録90例のうち、50kmを超えた記録は65例であった。国内放鳥外国回収の58例は、ロシア北東部の広範囲から得られた。このうちほとんどは春秋の移動時期の回収であったが、マガダン・ヤクート地方から１例ずつ繁殖期と思われる時期の回収が得られた。国内放鳥国内回収はすべてが埼玉県越谷市の宮内庁鴨場で11～１月に放鳥されており、北海道から長崎県にかけて回収されていたが、ほとんどの記録が１年以上経過したものであった。

新放鳥数		1,770	羽
回収内訳	回収総数	移動回収	
国内放鳥国内回収	36	32(7)	
国内放鳥外国回収	58	58(58)	
外国放鳥国内回収			
外国放鳥外国回収			
計	94	90(65)	
移動回収率		5.08	%
最長移動距離		3,955	km
最長回収期間		4,325	日

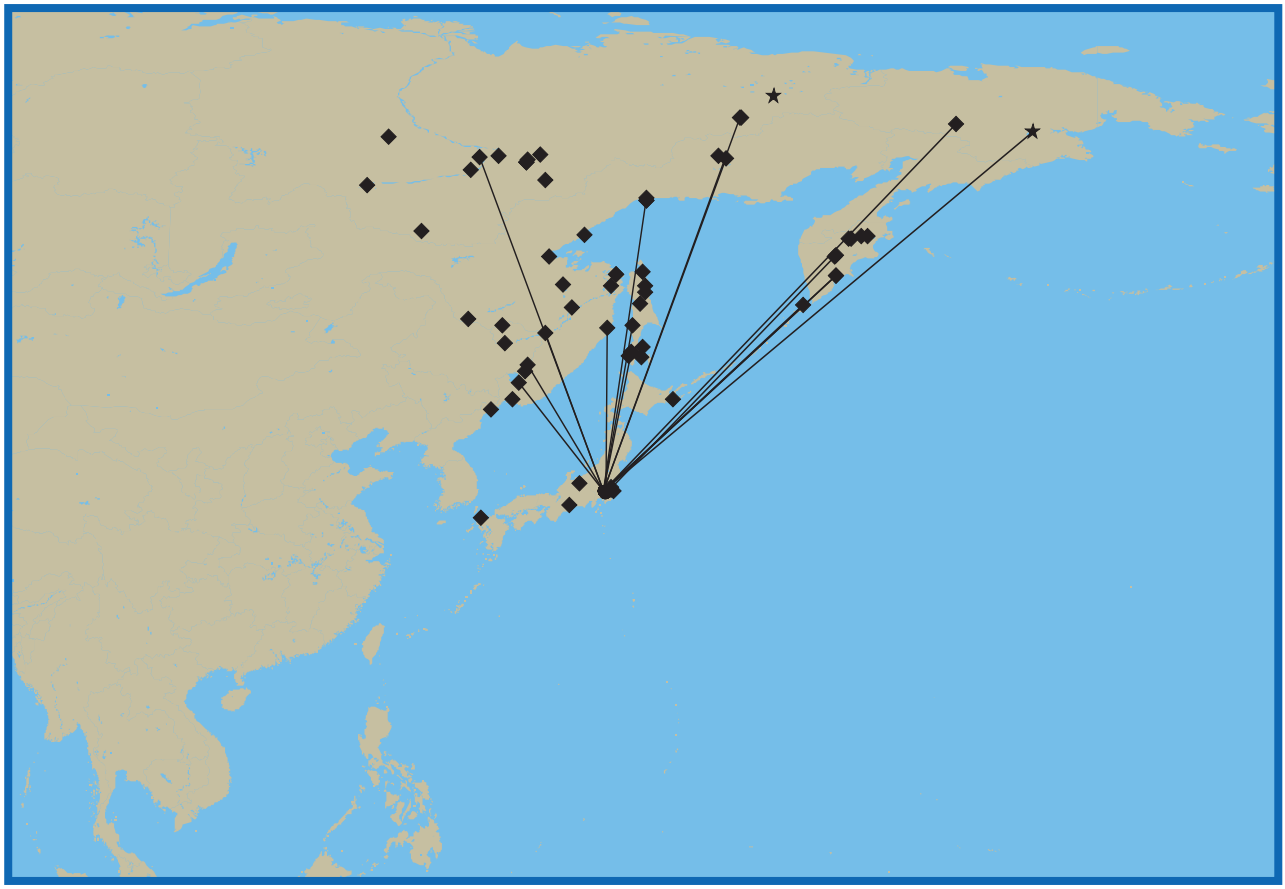


図3.21　ハシビロガモ *Anas clypeata* の回収記録

22. ホシハジロ　*Aythya ferina*,　Pochard

形態　全長約49cm。雄は頭部と頸が赤褐色で、胸は黒い。背と腹は灰色、上尾筒と下尾筒は黒い。嘴は黒くて中半部が鉛色、足も鉛色。虹彩は赤い。雌は全体に褐色で、目の周囲と後方に淡色の線がある。虹彩は褐色。

分布　ヨーロッパ中東部からバイカル湖で繁殖し、冬はヨーロッパ・北アフリカ・中近東・インド・中国東部・日本に渡る。日本では冬鳥として全国に渡来する。北海道東部で繁殖記録がある。

生態　湖沼・河川・内湾などにすむ。本種はキンクロハジロ・スズガモ等とともに潜水採餌ガモと呼ばれ、マガモ・ヒドリガモ・オナガガモ等の水面採餌ガモと異なり、水中に潜って餌を捕る。

回収記録　移動回収記録58例のうち、50kmを超えた記録は33例であった。国内放鳥外国回収・外国放鳥国内回収は、ともに他のカモ類と異なりロシア中南部の内陸からの記録が多く、特に北緯45°～60°・東経110°～125°の範囲で多かった。国内放鳥国内回収39例は、３例を除きすべて関東地方の埼玉県・千葉県・東京都で11・12月に放鳥され、岩手県から京都府にかけて回収されていた。

新放鳥数		3,767	羽
回収内訳	回収総数	移動回収	
国内放鳥国内回収	42	39(14)	
国内放鳥外国回収	18	18　18)	
外国放鳥国内回収	1	1(　1)	
外国放鳥外国回収			
計	61	58(33)	
移動回収率		1.51	%
最長移動距離		4,999	km
最長回収期間		2,537	日

図3.22　ホシハジロ *Aythya ferina* の回収記録

23. キンクロハジロ *Aythya fuligula*, Tufted Duck

形態　全長約47cm。雄は頭部・胸・体上面が黒く、頭部には紫色光沢がある。後頭に房状の冠羽がある。脇と腹は白く、下尾筒は黒い。嘴は青灰色で先端が黒く、足は青灰色。虹彩は黄色。雌は全体に黒褐色で、冠羽は雄よりも短い。

分布　ユーラシア北部で繁殖し、ヨーロッパ・北アフリカ・中近東・インド・東南アジア・中国東部・日本で越冬する。日本では北海道で少数が繁殖するほか、冬鳥として全国に渡来する。

生態　湖沼、河川にすみ、内湾にいることもある。他の習性は他のカモ類と同じ。

回収記録　移動回収記録35例のうち50kmを超えた記録は29例であった。国内放鳥外国回収は、繁殖期にロシアの高緯度地方で２例回収された他、移動の時期にはカムチャツカ・サハリン・ハバロフスク周辺の各地で回収されていた。国内放鳥国内回収のうち短期間回収は３例で、いずれも北海道浜頓別町で10月に放鳥され、21日後に山梨県河口湖町、52日後に石川県加賀市、88日後に北海道早来町でそれぞれ回収された。

新放鳥数		1,375	羽
回収内訳	回収総数	移動回収	
国内放鳥国内回収	19	18(12)	
国内放鳥外国回収	17	17(17)	
外国放鳥国内回収			
外国放鳥外国回収			
計	36	35(29)	
移動回収率		2.55	%
最長移動距離		3,927	km
最長回収期間		1,892	日

図3.23　キンクロハジロ *Aythya fuligula* の回収記録

24. スズガモ　*Aythya marila,*　Scaup

形態　全長約51cm。雄は頭部から胸が黒く、頭部には緑色光沢がある。背は白く細い波状斑があり、灰色に見える。脇と腹は白い。上尾筒と下尾筒は黒い。嘴は青灰色で先端が黒く、足は青灰色。虹彩はオレンジを帯びた黄色。雌は全身黒褐色で、嘴基部には幅広い白斑がある。

分布　ユーラシアおよび北アメリカ北部で繁殖し、ヨーロッパ・ペルシア湾・カスピ海・ウスリー・中国東北部・日本・北アメリカ西海岸および東海岸で越冬する。日本には冬鳥として全国に渡来する。

生態　内湾・港にすむ。湖沼にいることは少ない。他の習性はホシハジロと同じ。

回収記録　移動回収記録24例はすべて50km以上離れた回収で、国内放鳥外国回収のうち、18例は北海道浜頓別町で10～11月に放鳥され、回収地はヤクート・マガダン・サハリン地方に限られていた。短期間の回収は１例も存在しなかった。国内放鳥国内回収の５例もみな北海道浜頓別町で10月に放鳥されたもので、約１ヶ月後に青森県三沢市で、約１ヶ月半後に千葉県小見川町と北海道蘭越町で、４ヶ月後に滋賀県大津市で、約６年後に青森県上北町で、それぞれ回収された。

新放鳥数		804	羽
回収内訳	回収総数	移動回収	
国内放鳥国内回収	5	5（ 5）	
国内放鳥外国回収	19	19（19）	
外国放鳥国内回収			
外国放鳥外国回収			
計	24	24（24）	
移動回収率		2.99	%
最長移動距離		3,688	km
最長回収期間		2,921	日

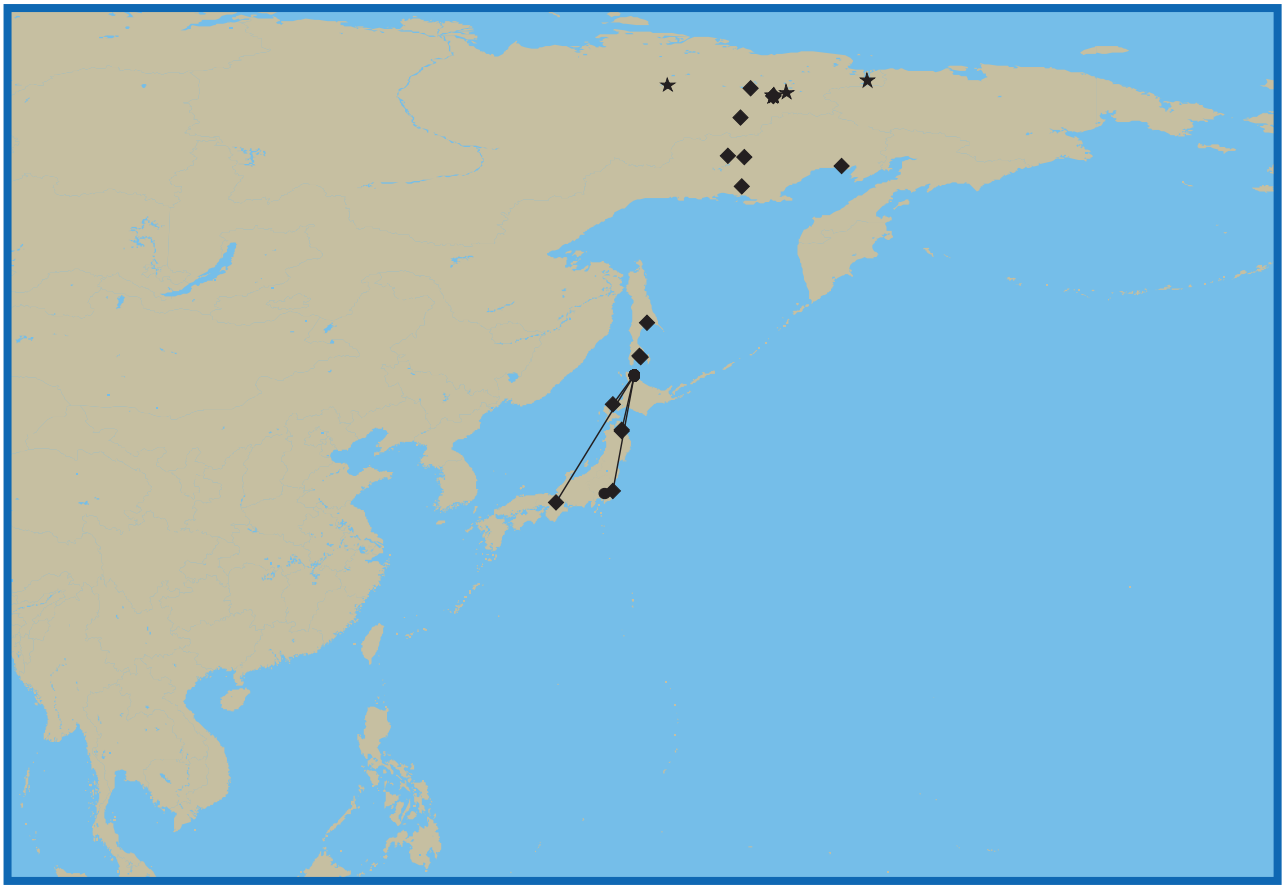


図3.24　スズガモ *Aythya marila* の回収記録

25. オオタカ *Accipiter gentilis,* Goshawk

形態　全長雄約50cm、雌約58cm、翼開帳105 ～ 130cm。雄は上面が暗青灰色で、白く明瞭な眉斑がある。尾は長めで黒褐色の横帯がある。下面は白く、喉・胸・腹・脇に黒褐色の細い横斑がある。嘴は黒くて基部は黄色、足は黄色。虹彩は橙色または黄色。飛翔時、翼は幅がある割に短く、白く長い下尾筒が下方から腰を覆い、腰が白いように見える。雌は雄よりも褐色味が強く、下面の横斑は雄より太い。虹彩は黄色。幼鳥は上面が褐色で羽縁は淡褐色、下面は淡褐色で黒褐色の横斑がある。虹彩は緑色がかった黄色。

分布　ユーラシアおよび北アメリカに分布する。日本では北海道・本州・四国で繁殖し、冬期は九州・南西諸島を含むほぼ全国で見られる。

生態　平地から山地の林・農耕地・河川敷などに生息。非繁殖期、成鳥雄は営巣地周辺にとどまることが多いが、雌は移動するものもある。また北方のものは渡りをすると考えられる。鳥類が獲物の半分以上を占めているが、リスやネズミなどの小型哺乳類も少数捕食する。

回収記録　移動回収記録16例はすべて国内放鳥国内回収で、11例が50km以上離れた記録であった。繁殖期に雛で放鳥された10例はすべて短期間回収され、内訳は同じ繁殖期間内に１例、生まれた年の秋の移動時期に８例、生まれてから最初の越冬期に１例であった。特に同じ繁殖期間内に回収された例では、栃木県黒磯市で６月に放鳥された雛が51日後に181km離れた新潟県山北町で回収された。生まれた年の秋の移動時期に回収された８例では、放鳥地からの距離で分けると50 ～ 100kmが３例、101 ～ 200kmが４例、301 ～ 400kmが１例であった。生まれてから最初の越冬期では、栃木県黒磯市で６月に放鳥された雛が約７ヶ月後の１月に556km離れた和歌山県御坊市で回収された。なお、愛知県弥富町弥富野鳥園において幼鳥で12月に保護された後に放鳥された例では、６ヶ月後の５月に1,040km離れた北海道砂川市で回収された。

新放鳥数		341	羽
回収内訳	回収総数	移動回収	
国内放鳥国内回収	16	16(11)	
国内放鳥外国回収			
外国放鳥国内回収			
外国放鳥外国回収			
計	16	16(11)	
移動回収率		4.69	%
最長移動距離		1,040	km
最長回収期間		666	日
絶滅危惧Ⅱ類			
国内希少野生動植物種			

図3.25　オオタカ *Accipiter gentilis* の回収記録

26. ナベヅル　*Grus monacha*,　Hooded Crane

形態　全長約100cm。頭部と頸上半部は白い。額と頭頂は黒く、目の上は赤い。頸下半部以下の体は灰黒色、風切と尾は黒。嘴は黄色みを帯びた白。足は長く、黒褐色。幼鳥は成鳥の白い部分が淡褐色で、上面は褐色味が強い。

分布　ロシアのウスリー川およびアムール川流域・中国東北部で繁殖し、日本・朝鮮半島・中国南東部で越冬する。日本では冬鳥として鹿児島県出水平野・山口県周南市八代に渡来し、ほかでは少ない。世界に分布する本種のほとんどが日本で越冬すると考えられている。

生態　水田・畑・河川などに生息する。冬期は集団で越冬するが、家族単位で行動している。餌は穀物・水草・小型魚類・カエルなど。

回収記録　通常の移動回収記録と、カラーマーキング個体の観察による移動記録を計２枚の地図に示した。

移動回収記録は国内放鳥外国回収が２例であった。いずれも本種の越冬地である鹿児島県出水市で越冬期（12･２月）に放鳥され、朝鮮半島（韓国と北朝鮮で各１例）で３月に回収されていた。なお、本種及びマナヅルは小型の送信機を装着し、人工衛星によって移動を追跡した調査も実施されている。

新放鳥数		195	羽
回収内訳	回収総数	移動回収	
国内放鳥国内回収			
国内放鳥外国回収	2	2(2)	
外国放鳥国内回収			
外国放鳥外国回収			
計	2	2(2)	
移動回収率		1.03	%
最長移動距離		740	km
最長回収期間		1,570	日
絶滅危惧Ⅱ類 国際希少野生動植物種			

図3.26a　ナベヅル *Grus monacha* の回収記録

カラーマーキングによる観察記録

カラーマーキング個体の観察は17例あり、ロシア沿海州のビキン川で幼鳥で放された個体が出水市で観察され、同一個体が翌シーズンには山口県周南市八代で観察された。またロシアのチタ州ダウルスキー保護区で放鳥された個体が出水市で観察された例は、西の繁殖個体群との関連を示唆している。

図3.26b　ナベヅル *Grus monacha* のカラーマーキング観察記録

27. マナヅル　*Grus vipio,*　White-naped Crane

形態　全長約120cm。頭部と後頸は白い。額と目の周囲は赤く、目の後方に灰色の丸い斑がある。体は灰黒色、翼は灰色。嘴は黄緑色。足は長く、淡い紅色。幼鳥は全体に褐色味が強い。

分布　ロシアのハンカ湖周辺・アムール川流域・中国東北部で繁殖し、朝鮮半島南部・日本・中国長江下流域で越冬する。日本には冬鳥として渡来し、鹿児島県出水平野では現在約2,000羽が越冬する。ほかの地域ではまれ。本種の生息数は世界中で約4,000 ～ 5,000羽と推定され、うち半数は出水平野で越冬することになる。

生態　水田・畑・湿地などに生息する。冬期は集団で越冬するが、家族単位で行動している。餌は穀物・植物の根・水草・小型魚類・カエルなど。

回収記録　通常の移動回収記録と、カラーマーキング個体の観察による移動記録を１枚ずつ図示した。

移動回収記録は国内放鳥外国回収が３例、外国放鳥国内回収が１例であった。国内放鳥外国回収は３例とも鹿児島県出水市で越冬期（10･１月）に放鳥され、朝鮮半島（韓国）で12 ～３月に回収されていた。外国放鳥国内回収は本種の繁殖地であるロシアのアムール州ヒンガンスクにおいて幼鳥で放鳥され、４年５ヶ月後に出水で回収されたものである。

新放鳥数		122	羽
回収内訳	回収総数	移動回収	
国内放鳥国内回収			
国内放鳥外国回収	3	3(3)	
外国放鳥国内回収	1	1(1)	
外国放鳥外国回収			
計	4	4(4)	
移動回収率		2.46	%
最長移動距離		1,880	km
最長回収期間		1,980	日
絶滅危惧Ⅱ類			
国際希少野生動植物種			

図3.27a　マナヅル *Grus vipio* の回収記録

カラーマーキングによる観察記録

カラーマーキング個体の観察は98例あり、ロシアのアムール川流域・ハンカ湖・ダウルスキー保護区で繁殖するものが出水市で越冬することが明確となった。また中国黒竜江省で生まれた個体が出水市で越冬することも判明した。

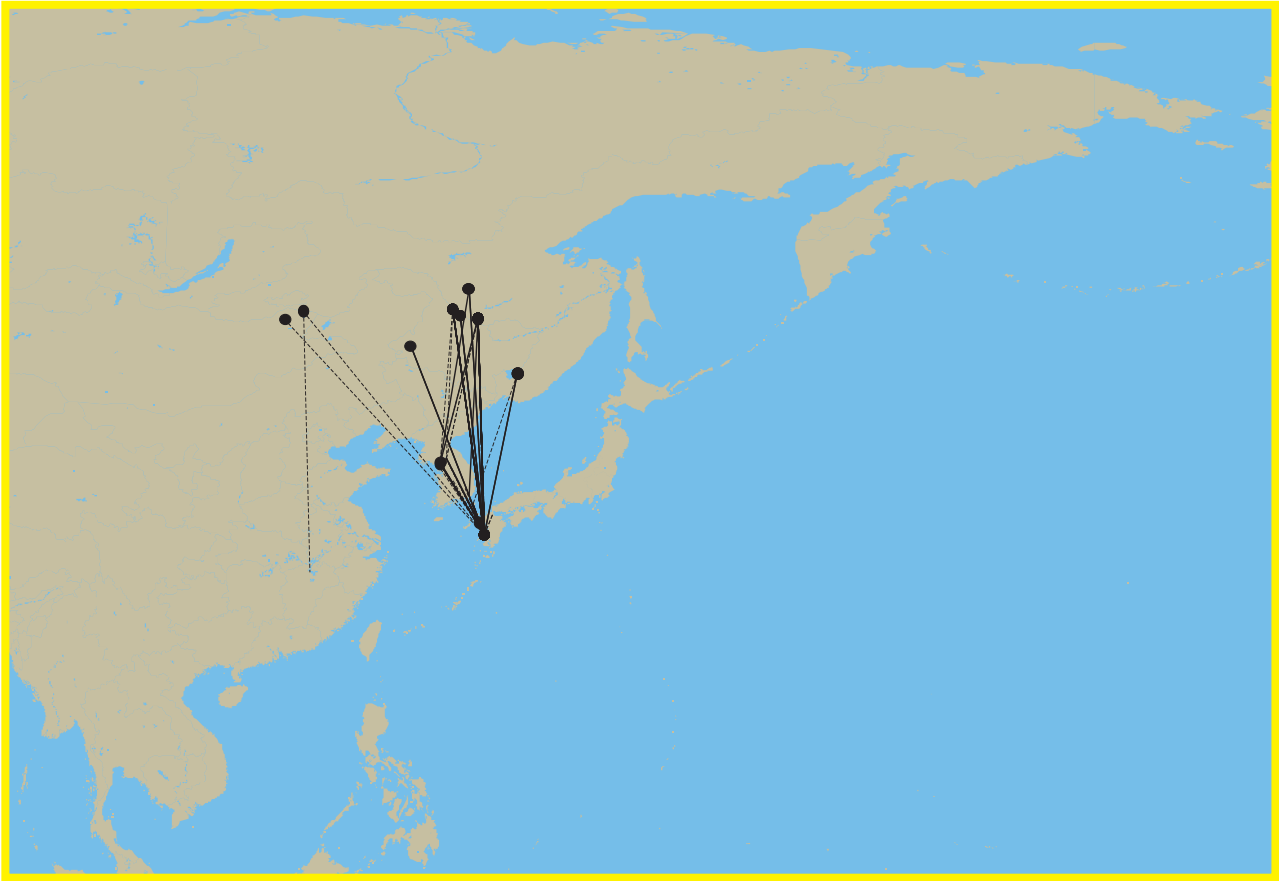


図3.27b　マナヅル *Grus vipio* のカラーマーキング観察記録

28. キョウジョシギ　*Arenaria interpres,*　Turnstone

形態　全長約22cm。ずんぐりした体つき。夏羽は頭部から胸にかけて特徴のある白と黒の模様がある。背と翼上面は赤褐色で黒色の顕著な斑がある。胸以下の体下面は白い。嘴は短くて黒く、上方にやや反る。足はオレンジ色で短い。冬羽は頭部がほとんど褐色で、上面は暗褐色。幼鳥は冬羽に似るが、背と翼は淡色の羽縁が目立ち、鱗状の模様になる。

分布　ユーラシア北部および北アメリカ北部のツンドラで繁殖し、南アジア・アフリカ・オセアニア、中央および南アメリカで越冬する。日本では旅鳥として春と秋に全国に渡来し、南西諸島では越冬するものもいる。

生態　干潟・岩礁・水田などに生息する。嘴を貝や海藻などの下に差し込んでひっくり返し、潜んでいる餌を捕らえる。餌は甲殻類・貝類・昆虫など。

回収記録　通常の移動回収記録と、カラーマーキング個体の観察による移動記録を１枚ずつ図示した。

国内放鳥外国回収46例と外国放鳥国内回収42例の計88例を図示した。国内放鳥外国回収46例は、２例を除き５月に千葉県市川市および浦安町（現 浦安市）で放鳥されていた。回収地はアメリカ合衆国アラスカ州プリビロフ諸島セント・ジョージ島が過半数の32例を占め、ほかはロシアから10例（マガダン州５例・カムチャツカ州４例・ヤクート州１例）、フィリピン・パプアニューギニア・カロリン諸島から各１例であった。短期間回収の例として、1962年５月に浦安町で放鳥され、20日後 に4,419km離 れたロシアのマガダン州で回収された例があった。平均で１日に 約221km移 動 したことになる。外国放鳥国内回収は、すべて前出のセント・ジョージ島で８月に放鳥され、春期（４月２例、他は５月）に回収されていた。

セント・ジョージ島で放鳥された本種は秋期には回収されていないため、日本を経由せず主に南太平洋に渡って越冬し、春には秋と異なる経路で日本列島沿いに北上するのではないかと考えられている。

新放鳥数		1,461	羽
回収内訳	回収総数	移動回収	
国内放鳥国内回収	10	1（ 0）	
国内放鳥外国回収	46	46(46)	
外国放鳥国内回収	42	42(42)	
外国放鳥外国回収			
計	98	89(88)	
移動回収率		3.22	%
最長移動距離		4,602	km
最長回収期間		9,612	日

図3.28a　キョウジョシギ *Arenaria interpres* の回収記録

カラーマーキングによる観察記録

カラーマーキングは、再捕獲または死体回収によらずに個体の移動が確認できる優れた方法である。東アジアからオーストラリアにかけての地域におけるシギ・チドリ類のカラーマーキングは、オーストラリアを中心に1989年から実施されており、日本では1988年に開始されその後継続して行われている。

図示した個体は1993年８月に愛知県名古屋市で、もう１例は1995年８月に千葉県習志野市で観察されており、いずれもオーストラリアのビクトリア州南部において越冬中に放鳥されたものである。これら２例は８月の観察記録であるため、繁殖地から越冬地への移動の途中個体であると推察される。

図3.28b　キョウジョシギ *Arenaria interpres* のカラーマーキング観察記録

29. トウネン　*Calidris ruficollis*,　Red-necked Stint

形態　全長約15cm。日本で記録されるシギ・チドリ類の中でも小さい部類に属し、スズメと同じくらいの大きさ。夏羽は頭部と胸・背が赤褐色で、黒褐色の縦斑がある。腹以下の体下面は白い。嘴は短くて黒く、足も黒。冬羽は上面が灰褐色。幼鳥は雨覆の羽縁が褐色。

分布　中部シベリア北部・ベーリング海沿岸・アラスカ北西部で繁殖し、東南アジアからオーストラリア・ニュージーランドで越冬する。日本では旅鳥として春と秋に全国に渡来し、少数は越冬する。

生態　干潟・河川・水田・砂浜・入り江などに生息する。汀線沿いや泥の上を歩き回り、甲殻類・昆虫・ゴカイなどを食べる。

回収記録　移動回収記録 ８例のうち50km以上離れた回収７例と、カラーマーキング個体の観察による移動記録を図示した。

50kmを超えた回収７例の内訳は、国内放鳥外国回収が３例・外国放鳥国内回収が４例であった。国内放鳥外国回収は３例とも短期間の回収で、1991年８月下旬に北海道根室市で放鳥され翌年４月下旬に中国上海市で回収・1992年９月上旬に北海道紋別市で放鳥され翌年４月中旬に上海市崇明島で回収・1976年８月下旬に仙台市で放鳥され同年10月下旬にオーストラリアのニューサウスウェールズ州で回収となっていた。おそらく、最後の例は越冬地からの回収、他の２例は渡りの中継地からの回収であろう。

外国放鳥国内回収はいずれも１年以上経過後のもので、1990年５月下旬にロシアのカムチャツカ州で放鳥され３年後の５月下旬に北海道紋別市で、1993年２月中旬にオーストラリアのビクトリア州で放鳥され２年後の８月下旬に千葉県木更津市で、1985年８月上旬にビクトリア州で放鳥され２年後の７月下旬に新潟県新潟市でそれぞれ回収された。このうち最後の例は回収され再放鳥された翌日に16km離れた新潟市内で保護され、この記録も回収数に含めてあるが図示はしていない。

新放鳥数		4,709	羽
回収内訳	回収総数	移動回収	
国内放鳥国内回収	1	1(0)	
国内放鳥外国回収	3	3(3)	
外国放鳥国内回収	4	4(4)	
外国放鳥外国回収			
計	8	8(7)	
移動回収率		0.08	%
最長移動距離		8,567	km
最長回収期間		1,094	日

図3.29a　トウネン *Calidris ruficollis* の回収記録

カラーマーキングによる観察記録

カラーマーキング個体の観察による移動記録は計39例が知られ、内訳は国内放鳥国内観察が20例・国内放鳥外国観察が４例・外国放鳥国内観察が15例である。国内放鳥国内観察は11例が北海道根室市・10例は北海道紋別市で放鳥され、観察地は日本海側は石川県・兵庫県・山口県・福岡県で、太平洋側は北海道・茨城県・東京都・愛知県・三重県・徳島県・高知県・大分県・鹿児島県にわたっていた。国内放鳥外国観察は４例とも北海道根室市で放鳥されており、３例はオーストラリアで、１例は台湾台中市で観察された。外国放鳥国内観察の放鳥地もすべてオーストラリアで、ビクトリア州放鳥の個体が茨城県・千葉県・東京都・愛知県・石川県で、ウエスタンオーストラリア州放鳥の個体が兵庫県・徳島県で、クイーンズランド州放鳥の個体が愛知県で確認された。

以上から、本種は国内でも国際間でも異なる放鳥地の個体が渡りの中継地で合流することがあるようであるが、それらの個体の繁殖地または越冬地が同一であるかどうかは不明のままである。

図3.29b　トウネン *Calidris ruficollis* のカラーマーキング観察記録

30. キアシシギ *Heteroscelus brevipes,* Asian Wandering Tattler

形態　全長約25cm。夏羽は上面が灰褐色で、胸・脇に黒褐色の波形をした横斑がある。腹以下の下面は白い。嘴はまっすぐで黒く、下嘴基部は黄色がかる。足は黄色。冬羽は胸・腹・脇の横斑がない。幼鳥は冬羽に似て、肩羽・雨覆・三列風切の各羽に白い縁取りがあり、嘴は全体に灰色味が強い。本種は、飛んだときに下雨覆が暗色で腰・尾に目立つ模様が出ないのが特徴となっている。

分布　シベリア東北部で繁殖し、主に東南アジア・オセアニアで越冬する。日本では旅鳥として春と秋に全国に渡来し、少数は南西諸島で越冬する。

生態　干潟・河川・水田・入り江・岩礁など水辺に幅広く生息する。汀線沿いや泥の上を歩き回って、昆虫・甲殻類・ゴカイなどを食べる。

回収記録　本種の移動回収記録は16例あるが、50kmを超えた回収は14例で、内訳は国内放鳥国内回収が４例・国内放鳥外国回収が６例・外国放鳥国内回収が４例であった。

新放鳥数		7,017	羽
回収内訳	回収総数	移動回収	
国内放鳥国内回収	14	6(4)	
国内放鳥外国回収	6	6(6)	
外国放鳥国内回収	4	4(4)	
外国放鳥外国回収			
計	24	16(14)	
移動回収率		0.17	%
最長移動距離		7,816	km
最長回収期間		2,847	日

国内放鳥国内回収は４例とも直接の移動を実証する回収ではなかった。国内放鳥外国回収の回収地の内訳はロシア２例・フィリピン１例・オーストラリア３例で、ロシアからの２例はいずれも本種の繁殖地と考えられるマガダン州で回収され、放鳥地の千葉県からそれぞれ3,964km、3,009km離れていた。フィリピンからの例は、９月に北海道根室市で放鳥された幼鳥が39日後にサマール島北部で回収されたもので、放鳥地から3,938km離れている。オーストラリアではいずれもクイーンズランド州で１・５・９月に回収され、放鳥地も３例とも千葉県である。

外国放鳥国内回収の放鳥地は、３例がオーストラリア、１例が台湾で、４例とも千葉県木更津市で回収された。オーストラリアではいずれも本種の越冬地であるニューサウスウェールズ州で４月に放鳥され１年１ケ月後の５月に回収された１例、11月に放鳥され７年９ケ月後・１年９ケ月後の８月に回収された２例が記録され、台湾では３月に放鳥され７年６ケ月後の８月に回収されていた。本種は台湾でも越冬している。

図3.30a　キアシシギ *Heteroscelus brevipes* の回収記録

図3.30b　キアシシギ *Heteroscelus brevipes* のカラーマーキング観察記録

31. ユリカモメ *Larus ridibundus,* Black-headed Gull

形態　全長約38cm。小型のカモメ類。冬羽は頭部・下面・尾が白く、目の上と頬に黒色の斑がある。背と翼上面が淡い青灰色で、外側初列風切は黒い。嘴と足は鮮やかな赤色で、嘴先端は黒い。夏羽は頭部が黒褐色となり、目の上下には白い縁取りがある。幼鳥は冬羽に似るが、雨覆に黒褐色の斑や帯があり、次列風切は黒く、尾羽の先端には黒帯がある。嘴と足はオレンジ色。

分布　イギリス・アイスランド・ユーラシア北部で繁殖し、冬は北アフリカ・インド洋東南アジア・北アメリカ東海岸に渡る。日本では冬鳥として渡来し、全国で見られる。

生態　海岸・河川・湖沼・河口などに生息する。近年、公園の池や河川敷などで人間が与えるパンに餌付く例が増えている。

回収記録　本種の移動回収記録は36例あり、このうち50kmを超えたもの32例とカラーリング付き個体の観察記録を、計２枚の地図に示した。

新放鳥数		1,440	羽
回収内訳	回収総数	移動回収	
国内放鳥国内回収	9	9(5)	
国内放鳥外国回収	3	3(3)	
外国放鳥国内回収	24	24(24)	
外国放鳥外国回収			
計	36	36(32)	
移動回収率		0.83	%
最長移動距離		3,852	km
最長回収期間		5,452	日

50kmを超えた回収記録の内訳は国内放鳥国内回収５例・国内放鳥外国回収３例・外国放鳥国内回収24例であった。国内放鳥国内回収はすべて越冬期に京都府で放鳥されていた。国内放鳥外国回収は、越冬期に京都府で放鳥された個体が、繁殖期にロシアのヤクート州とカムチャツカ州で、12月にハバロフスクで回収された。京都—ヤクート間の回収記録は本種の最長距離移動記録で、その距離は3,852kmであった。外国放鳥国内回収は８月にヤクートにおいて成鳥で放鳥された１例を除いて、他は全てカムチャツカで６・７月に雛または幼鳥で放鳥されていた。最も短期間の回収記録は、放鳥後61日でヤクートから2,575km離れた北海道浜頓別町へ移動したものだった。

国内での回収は、外国放鳥、国内放鳥とも９月下旬から５月まで見られ、回収地は北海道から愛媛県まで及んでいた。北海道では、早くは北部の浜頓別町で10月下旬に回収があり、南部の函館市では厳冬期である12・１月にも回収されていた。国内で越冬する本種の一部は、カムチャツカとシベリア東部の北極圏で繁殖することが、これらの記録から明らかになった。

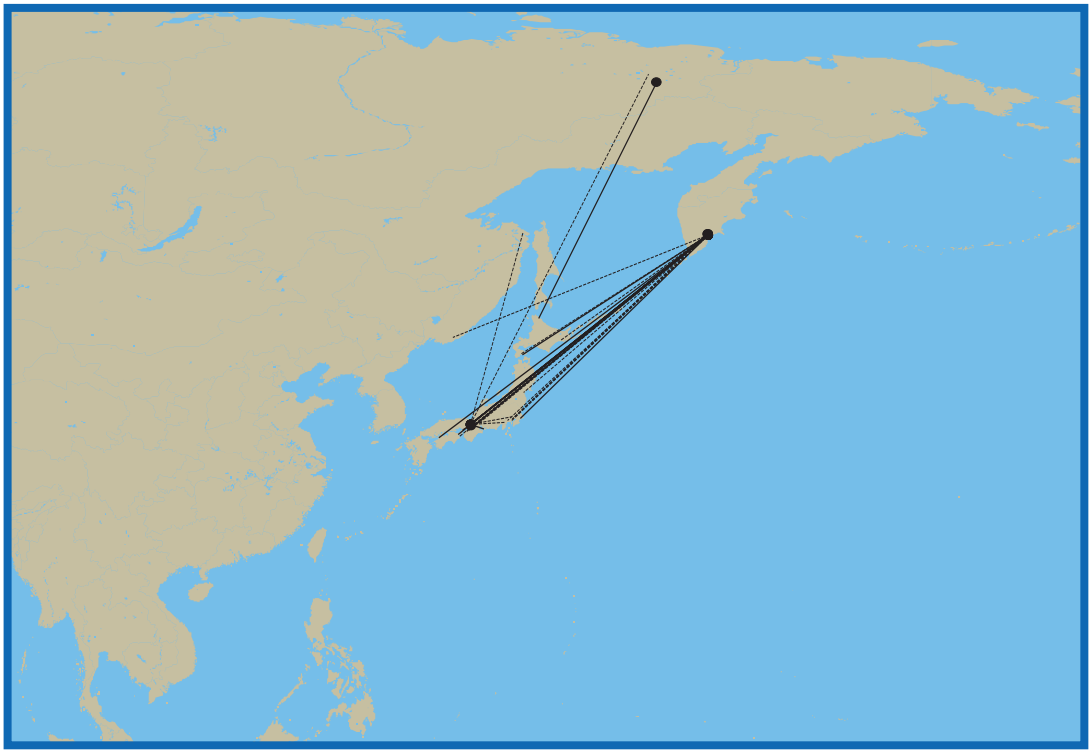


図3.31a　ユリカモメ *Larus ridibundus* の回収記録

カラーマーキングによる観察記録

ロシアのカムチャツカ州において、個体識別が可能な番号入りのカラーリングを雛に付けて放鳥したところ、国内での観察記録が61個体について得られた。観察時期は10月下旬から５月上旬であった。観察地は関東から関西にかけての本州中部で多かったが、熊本県で１月・宮城県で４月の記録や、北海道で12・１・４月の記録もあった。61個体のうち41個体は生まれた年の冬に確認されており、９個体については２シーズン以上の越冬期録が得られた。また同一シーズン内に国内で50km以上移動した例は５個体で見られ、最も長いものは11月中旬に大阪府堺市で観察された個体が12月下旬に東京都大田区で再び観察された記録で、移動距離は400kmであった。その他は大阪—京都・兵庫—京都間の移動記録であった。

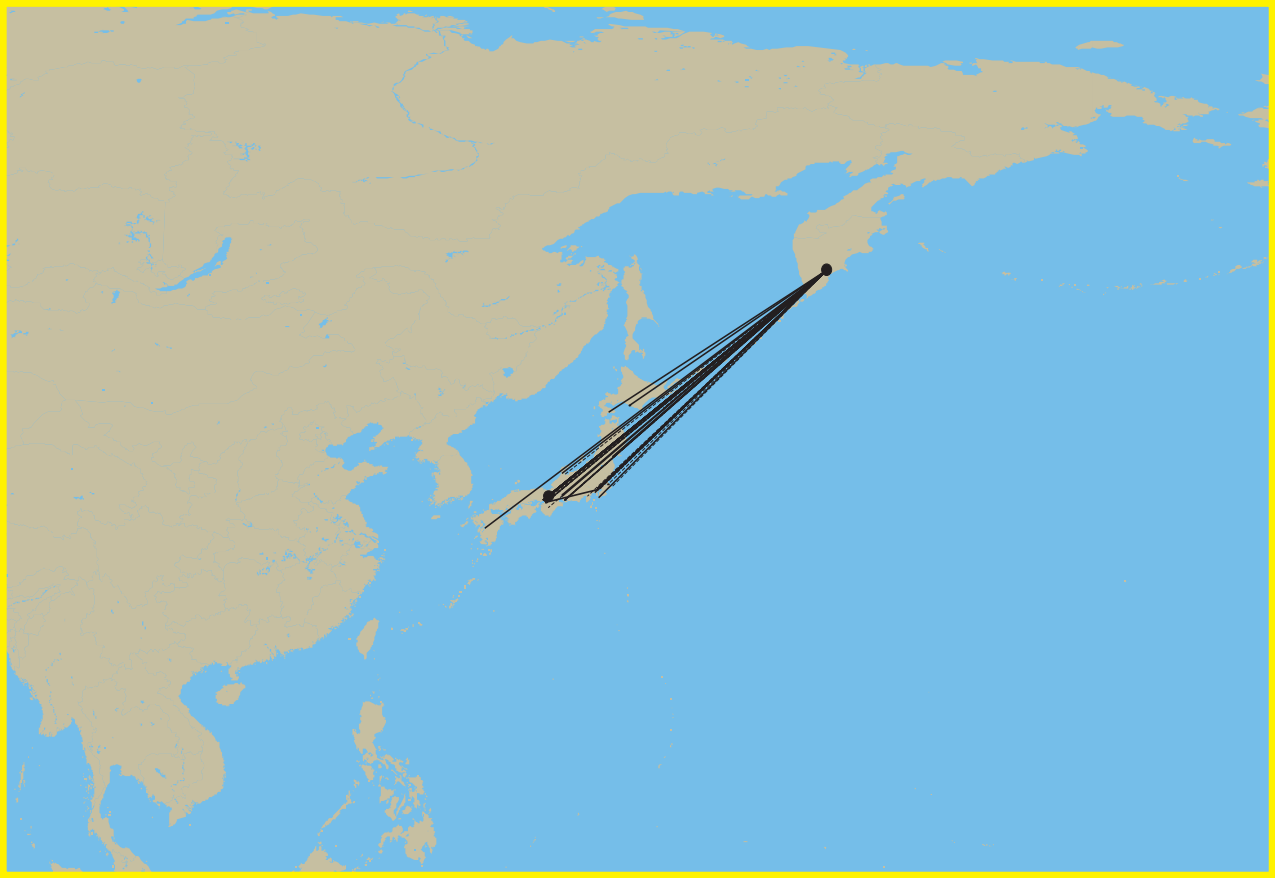


図3.31b　ユリカモメ *Larus ridibundus* のカラーマーキング観察記録

32. オオセグロカモメ *Larus schistisagus*, Slaty-backed Gull

形態　全長約55cm。大型のカモメ類。冬羽は頭部・体下面・尾が白く、頭部から頸にかけて灰褐色の斑がある。体上面は黒灰色で、外側初列風切は黒く、先端に白斑がある。日本で記録がある大型カモメ類の中では、体上面の色が最も濃い。嘴は黄色で太く、下嘴先端付近に赤い斑がある。足はピンク色。夏羽は頭部が白くなる。
分布　ウスリーからカムチャツカにかけての沿岸・コマンドル諸島・千島・サハリン・日本北部で繁殖し、冬は朝鮮半島および中国南部沿岸まで南下する。日本では東北地方以北で繁殖するほか、主に東日本に冬鳥として渡来し、西日本では少ない。
生態　沖合・海岸・港・河口などに生息する。他のカモメ類と共に混群を形成し、魚類・魚のあらなどを捕る。
回収記録　本種の移動回収記録は42例あり、このうち50km以上離れた34例を国内放鳥国内回収の26例と、国内放鳥外国回収の６例と外国放鳥国内回収の２例に分けて２枚の図に示した。

新放鳥数		9,141	羽
回収内訳	回収総数	移動回収	
国内放鳥国内回収	37	34(26)	
国内放鳥外国回収	6	6(6)	
外国放鳥国内回収	2	2(2)	
外国放鳥外国回収			
計	45	42(34)	
移動回収率		0.44	%
最長移動距離		4,516	km
最長回収期間		4,359	日

国内放鳥外国回収・外国放鳥国内回収

国内放鳥外国回収の６例はすべて繁殖期に北海道のコロニーにおいて雛もしくは幼鳥で放鳥されたもので、回収地はロシアのサハリン州が５例・フィリピンのミンダナオ島沖が１例であった。サハリン回収の５例中３例は生まれた翌年の繁殖期（７～９月）に、他の２例は非繁殖期（４年後の10月、５年後の５月）に回収されていた。フィリピンでの回収例は放鳥から約３ヶ月で4,516km移動した記録で、本種の最長移動記録であるとともに最も南からの回収記録でもある。本種の越冬分布は従来、中国南部沿岸までとされているが、まれにより南へ移動するものがあることが本例により判明した。

外国放鳥国内回収の放鳥地はロシアのカムチャツカと色丹島で、回収地はそれぞれ北海道増毛町と岩手県久慈市沖であった。いずれも繁殖期に雛または幼鳥で放鳥され、越冬期に回収されていた。

図3.32a　オオセグロカモメ *Larus schistisagus* の国内放鳥外国回収・外国放鳥国内回収

国内放鳥国内回収

国内放鳥国内回収26例の放鳥地はすべて北海道で、いずれも雛あるいは幼鳥で放鳥されていた。放鳥時期は、10月放鳥の１例を除きすべて繁殖期（６・７月）であった。放鳥後１年以内に回収された17例では、巣立ち後３ヶ月は北海道外への移動は見られず、繁殖地の北または東で回収された。11月以降翌年５月までの回収記録は繁殖地より南で得られ、最も遠方では1,541km離れた高知県で１月に回収された。しかし、厳冬期の１月に北海道南部で回収された記録も１例あった。また、愛知県における７月の回収例（この個体は結局死亡）があったが、これはまれな記録と思われる。一方、放鳥から１年以上後に回収された９例では、冬期に1,864km離れた鹿児島県で回収された１例を除いて北海道内からの回収であった。

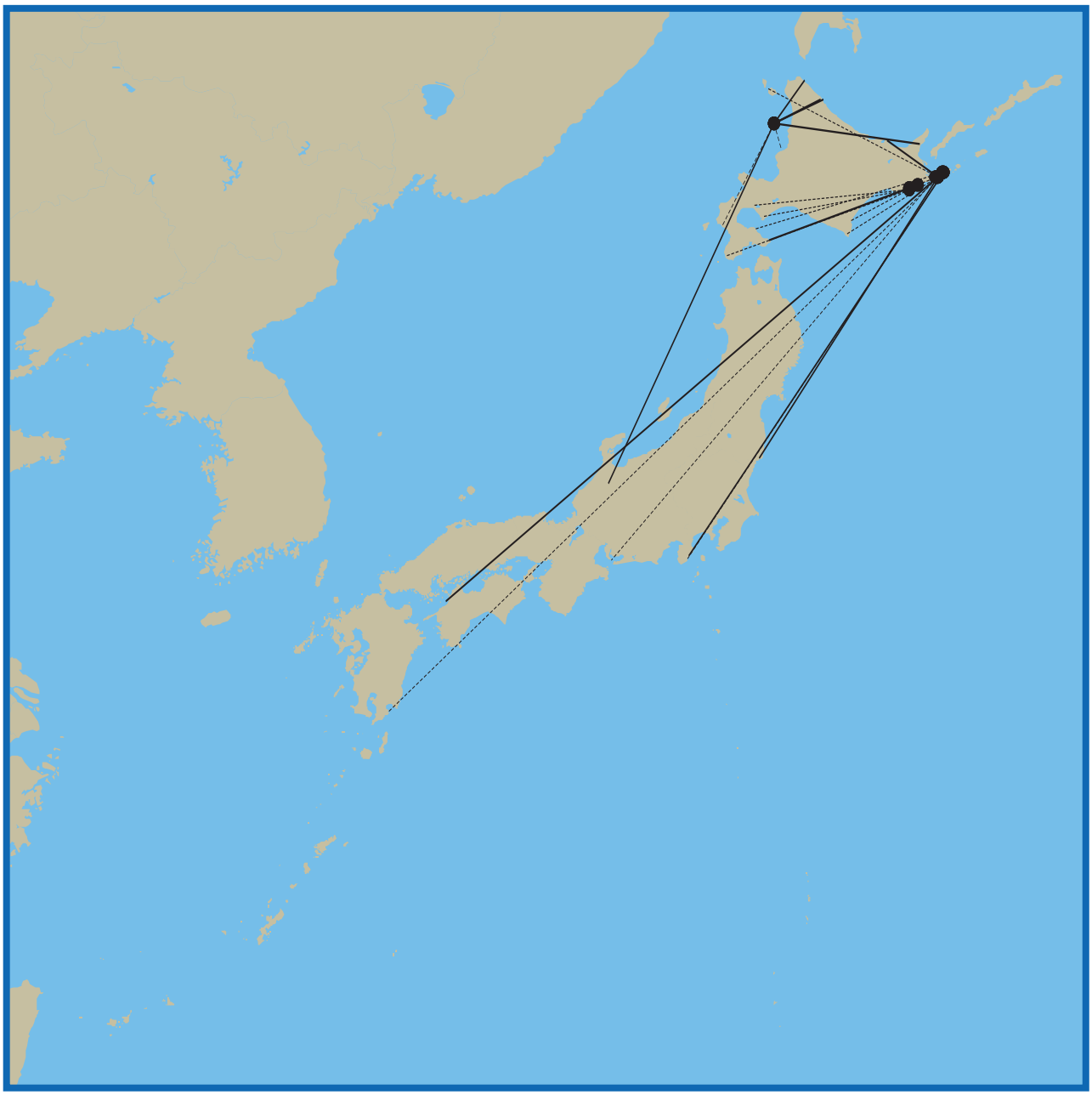


図3.32b　オオセグロカモメ *Larus schistisagus* の国内放鳥国内回収

33. ウミネコ *Larus crassirostris,* Black-tailed Gull

形態　全長約45cm。中型のカモメ類。冬羽は頭部・体下面が白く、後頭は褐色味がかる。体上面は黒灰色で、外側初列風切は黒く、先端に白斑がある。尾は白く、先端付近に黒く幅広い帯がある。嘴は黄色く、先端に赤と黒の斑がある。足は黄色。夏羽は頭部が白くなる。成鳥の尾に黒帯がある日本産のカモメ類は本種のみである。

分布　南千島･サハリン･日本･朝鮮半島･中国南部で繁殖し、冬はやや南下する。日本では北海道・本州・九州の沿岸および周辺の島々、伊豆諸島で繁殖し、冬期一部は南下する。

生態　海岸・港・河口などに生息する。他のカモメ類と混群を形成し、魚類・魚のあらなどを捕る。

回収記録　本種の移動回収記録は260例得られ、このうち50km以上離れた回収は235例であった。内訳は国内放鳥国内回収が204例・国内放鳥外国回収が15例・外国放鳥国内回収16例であった。国内放鳥国内回収は例数が多いため、青森県蕪島で放鳥のものとそれ以外のものに分けて図示した。

新放鳥数		75,998	羽
回収内訳	回収総数	移動回収	
国内放鳥国内回収	250	229(204)	
国内放鳥外国回収	15	15(15)	
外国放鳥国内回収	16	16(16)	
外国放鳥外国回収			
計	281	260(235)	
移動回収率		0.32	%
最長移動距離		4,274	km
最長回収期間		6,984	日

国内放鳥外国回収・外国放鳥国内回収

国内放鳥外国回収はすべて国内の繁殖地（北海道天売島および枝幸町・青森県蕪島）で、雛または幼鳥で放鳥されていた。回収はロシアのサハリン州と南千島では８～10月と５月に、韓国および中国では12～３月に得られた。

外国放鳥国内回収はすべてロシアのプリモルスク南部の繁殖地で幼鳥または成鳥で放鳥され、主に日本海沿岸の各地で９～６月の間に回収された。本州の太平洋岸では回収が得られなかった。また秋期および冬期には西日本での回収が、春期には新潟県・北海道など北日本での回収が多かった。

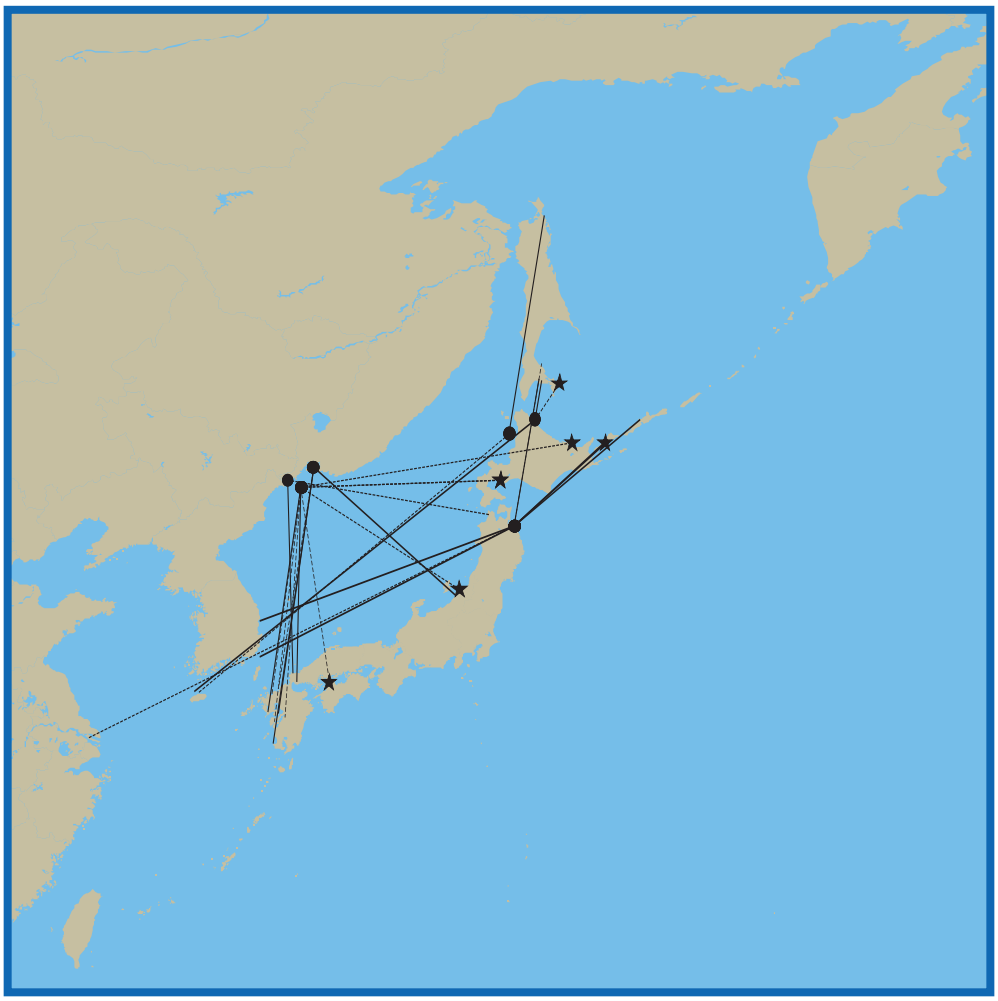
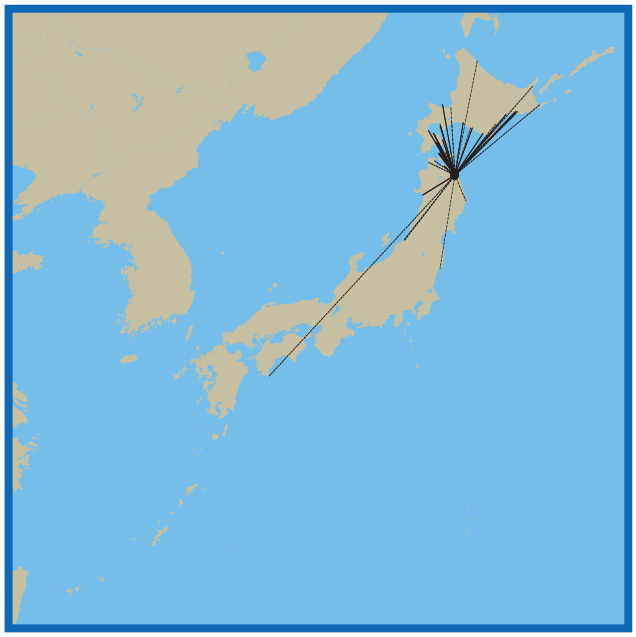


図3.33a　ウミネコ *Larus crassirostris* の国内放鳥外国回収・外国放鳥国内回収

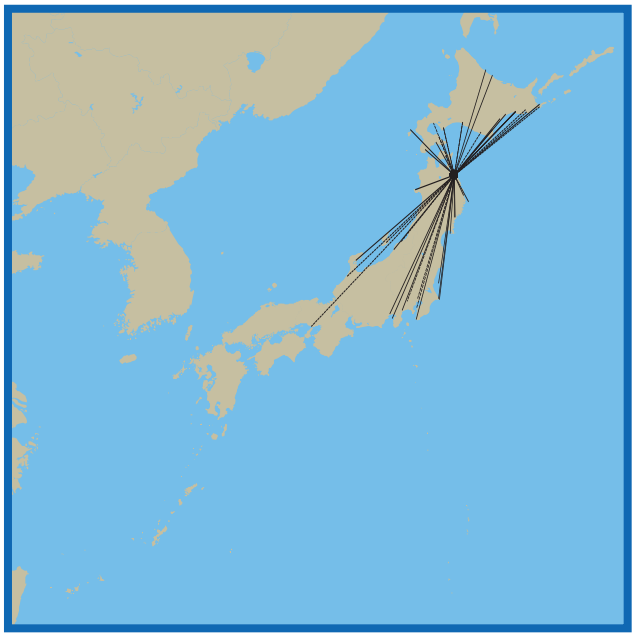
国内放鳥国内回収（蕪島放鳥）

蕪島で放鳥され50km以上離れた場所からの記録136例を、回収時期によって４つに区分し、図示した。

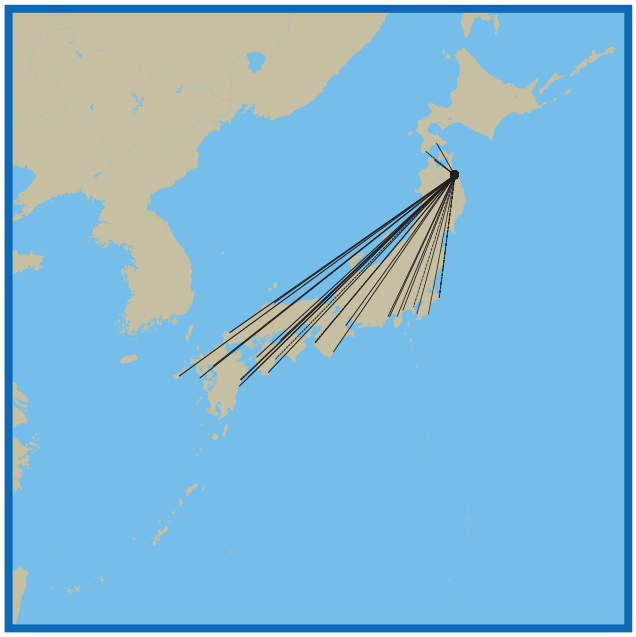
蕪島で放鳥された本種の繁殖期（５～８月）の回収は48例あり、この時期は繁殖地周辺の青森県内や北海道南部からの回収が多かった。繁殖地より離れた南方の高知県（５月）、福島県および新潟県（７月）で回収された例も得られたが、これらはいずれも１歳であったので繁殖に参加していなかった可能性が示唆される。最も遠方では、360km離れた釧路市からの回収（57日後）があった。秋期（９～11月）の回収46例では、９・10月は北海道からの記録が多く、10月中旬頃より東北から中部の沿岸での回収が増加する傾向があった。越冬期（12～２月）から春期（３・４月）にかけての回収は、12月の北海道南部での２例、１月上旬の青森県での１例を除き、すべて関東以西の主に太平洋側から得られた。１歳未満の個体で最も遠方では、放鳥地から1,427km離れた長崎県福江市で回収された例があった。このように、本種は繁殖終了後いったん繁殖地より北へ移動する傾向があり、冬期に南下し、春には再び北方で回収されていた。



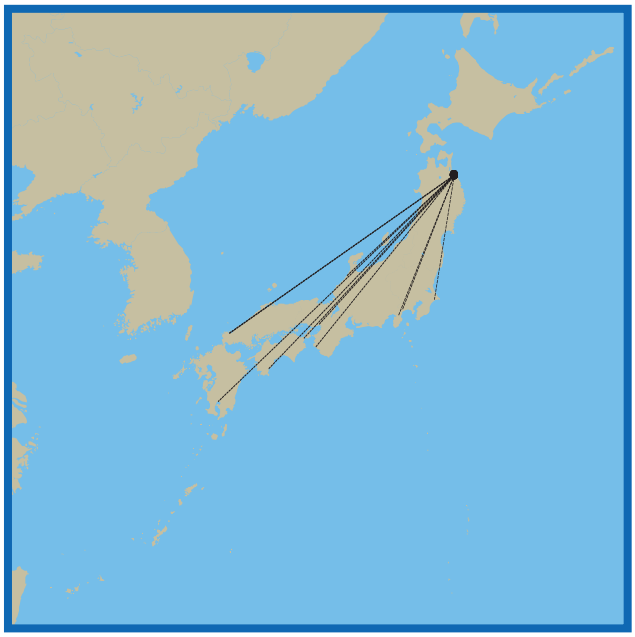
蕪島放鳥繁殖期（５－８月）回収



蕪島放鳥秋期（９－11月）回収



蕪島放鳥冬期（12－２月）回収



蕪島放鳥春期（３－４月）回収

図3.33b　ウミネコ *Larus crassirostris* の国内放鳥国内回収（青森県蕪島放鳥）

国内放鳥国内回収（蕪島以外放鳥）

蕪島以外の場所で放鳥され、50km以上離れた場所で回収された68例を図示した。放鳥地はすべて本種の繁殖地で、北海道３ヶ所、青森県・岩手県・東京都（八丈島）・新潟県・京都府・島根県各１ヶ所であった。放鳥時雛であった個体が繁殖年齢に達したのちに別の繁殖地で回収された例が得られた。すなわち、北海道枝幸町→北海道天売島・枝幸町→蕪島・天売島→北海道利尻町・青森県弁天島→蕪島（２例）・岩手県三貫島→蕪島（３例）などである。これらの回収例は出生地以外の場所で繁殖する個体があることを示唆している。回収記録を詳しく見ると、繁殖終了後10月ごろまでは道北の３ヶ所の繁殖地からは道北や道東への移動が目立ち、本州の繁殖地からは北への移動があった。冬から春にかけての回収は関東以西で多く、蕪島放鳥の場合と同様の傾向が見られた。

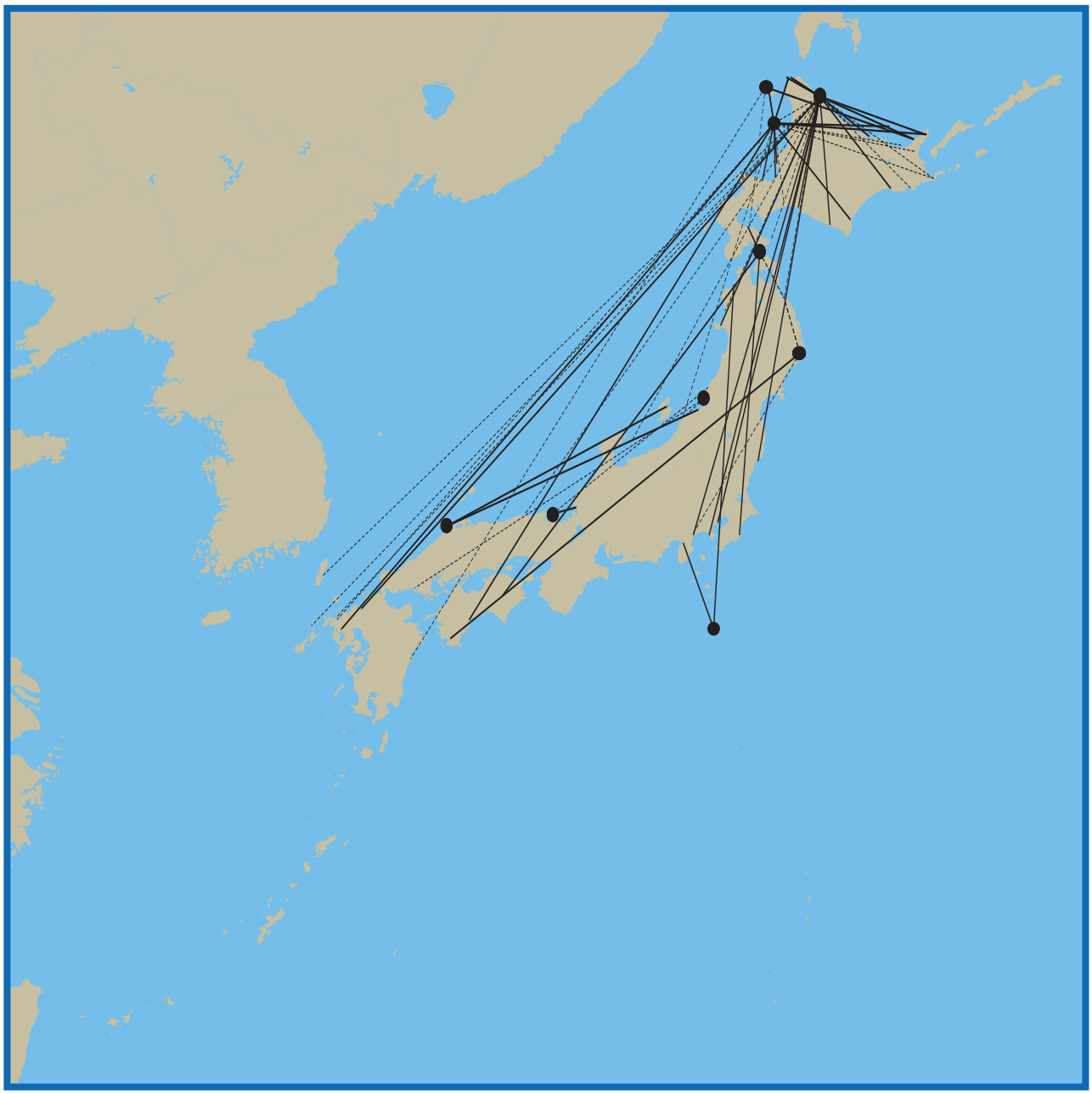


図3.33c　ウミネコ *Larus crassirostris* の国内放鳥国内回収（青森県蕪島以外放鳥）

34. ベニアジサシ　*Sterna dougallii,*　Roseate Tern

形態　全長約33cm、中型のアジサシ類。夏羽は額から後頭が黒く、下面は白い。翼上面と背は灰白色で、腰から尾は白い。尾は長い燕尾で、静止時、翼の先端を越えて突き出る。嘴は細長くて赤く先端は黒いが、全体が赤いものや全体が黒いものもいる。足は赤い。冬羽は額と頭頂が白くなり、嘴は黒、足は褐色。

分布　イギリス・デンマーク・アフリカ・インド洋の島々、中国南部沿岸・日本の南西諸島・東南アジア・オーストラリア・北アメリカ東海岸・カリブ海の島々で繁殖し、北方のものは冬は南下する。日本では夏鳥として奄美列島以南の南西諸島で繁殖する。近年福岡県の人工島でも繁殖しているのが確認された。本州・四国・九州ではまれに記録される。

生態　離島の岩礁・海洋に生息する。本州などで記録される時は干潟や砂浜、埋立地などで見られることが多い。海上を飛び回って餌を探し、見つけると水中に飛び込んで魚類・甲殻類などを捕る。

新放鳥数		7,964	羽
回収内訳	回収総数	移動回収	
国内放鳥国内回収	171	170(16)	
国内放鳥外国回収	1	1(1)	
外国放鳥国内回収			
外国放鳥外国回収			
計	172	171(17)	
移動回収率		2.15	%
最長移動距離		1,792	km
最長回収期間		4,736	日
準絶滅危惧			

回収記録　本種の移動回収記録は171例が得られたが、そのほとんどが沖縄県内の繁殖コロニー間での近距離回収で、50kmを超えた記録は17例であった。内訳は国内放鳥国内回収が16例・国内放鳥外国回収が１例であった。放鳥時の年齢は、成鳥53例に対し雛117例（不明１例を除く）で、雛の方が多かった。地図は沖縄放鳥沖縄県外回収と沖縄放鳥沖縄県内回収の２つに分けて図示した。

図3.34a　ベニアジサシ *Sterna dougallii* の長距離回収

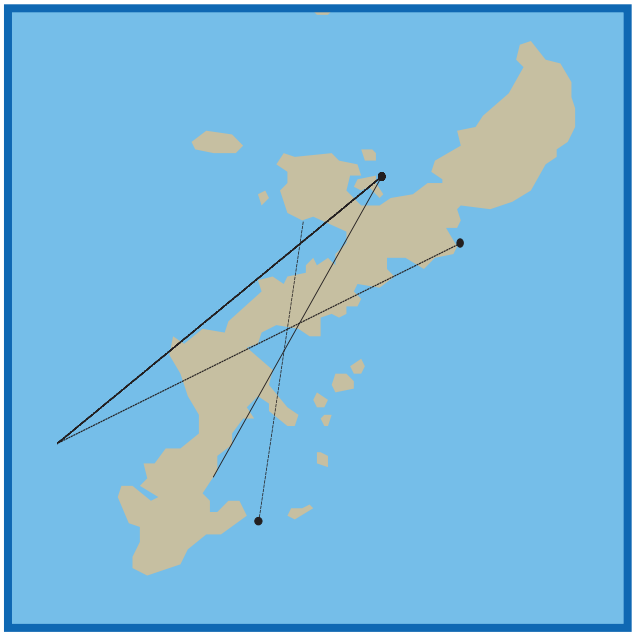


図3.34b　ベニアジサシ *Sterna dougallii* の沖縄県内回収

35. コアジサシ *Sterna albifrons,* Little Tern

形態　全長約26cm。小型のアジサシ類。夏羽は額が白く、頭頂から後頭と過眼線が黒い。翼上面と背は青灰色で、腰から尾と下面は白い。尾は長い燕尾。嘴は細長くて黄色く、先端が黒い。足はオレンジ色。冬羽は額の白色部が頭頂に達し、嘴は黒、足は黒褐色。

分布　ヨーロッパ・ロシア西部・アフリカ・中東・インド・東アジア・東南アジア・オーストラリア・北アメリカ中部から南アメリカ北部で繁殖し、北方のものは冬は南に渡る。日本では夏鳥として本州以南で繁殖する。

生態　海岸･干潟･湖沼･河川で採餌し、繁殖は砂浜、埋立地、河川の中州などで行う。水上を飛び回って餌を探し、見つけると水中に飛び込んで魚類・甲殻類などを捕る。

回収記録　本種の移動回収記録は107例であったが、50kmを超える記録は28例であった。これらを２枚の図に示した。また、カラーマーキングの観察記録を別に２枚の図に示した。

新放鳥数		18,112	羽
回収内訳	回収総数	移動回収	
国内放鳥国内回収	105	96(17)	
国内放鳥外国回収	10	10(10)	
外国放鳥国内回収	1	1(1)	
外国放鳥外国回収			
計	116	107(28)	
移動回収率		0.59	%
最長移動距離		8,165	km
最長回収期間		4,752	日
絶滅危惧Ⅱ類			

国内放鳥外国回収・外国放鳥国内回収

国内放鳥外国回収は10例ありすべて繁殖期の放鳥で、１例を除いて雛で放鳥されていた。回収地は台湾１例（４月）・フィリピン４例（９月３例・10月１例）・パプアニューギニア２例（５月・12月）・オーストラリアのクイーンズランド州１例（10月）・パラオ諸島１例（10月）・太平洋上１例（９月）であった。

外国放鳥国内回収は、オーストラリアのビクトリア州の越冬地で１月に放鳥された成鳥が、４年後の６月に8,165km離れた静岡県浜北市の繁殖地で回収されたものである。

国内放鳥国内回収

17例のうち、繁殖地で放鳥され、直後の移動時期に回収された例には、山形県河北町→千葉県木更津市、長野県長野市→千葉県木更津市、千葉県千葉市→茨城県潮来町、長野県飯山市→富山県黒部市の４例がある。これらの回収は、本種には繁殖地からの渡去時、日本海側や長野県から直接南下せず、東京湾沿岸に集結する渡去群に加わるものがあること、また繁殖地から南下する前に一度北上するものがあることを示している。

図3.35a　コアジサシ *Sterna albifrons* の長距離回収

図3.35b　コアジサシ *Sterna albifrons* の国内放鳥国内回収

カラーマーキングによる観察記録

日本におけるコアジサシのカラーマーキング調査は、主にカラーリングを用いて1990年より継続して行われている。

国内放鳥外国観察の記録は、1992-1994年の6-7月の間に成鳥で放鳥された個体が、1994年9月にオーストラリアのニューサウスウエールズ州で観察されたものである。この例は日本でカラーマーキングされた本種の国外からの最初の観察記録である。日本で繁殖するコアジサシの主要な越冬地はオーストラリア東部であると推察される。

国内放鳥国内観察の記録からは足環の回収記録と同様に、渡去時に東京湾沿岸に集結することが示されている。埼玉県熊谷市や茨城県波崎町のほか、静岡県豊田町からも東京湾沿岸への移動が確認された。

図3.35c　コアジサシ *Sterna albifrons* のカラーマーキング観察記録（国内放鳥外国観察）

図3.35d　コアジサシ *Sterna albifrons* のカラーマーキング観察記録（国内放鳥国内観察）

36. ウトウ *Cerorhinca monocerata*, Rhinoceros Auklet

形態　全長約38cm。夏羽は顔に２条の白い飾り羽がある。頭部と体上面は黒褐色。体下面は淡褐色で腹は白い。嘴はオレンジ色で太く、上嘴基部から１cmほどの角状の突起が出る。足は黄白色で太くて短い。冬羽は嘴の突起が小さくなり、顔の白い飾り羽は目立たない。
分布　サハリン・千島・日本北部・アリューシャン列島・アラスカ・北アメリカ西海岸で繁殖し、北方のものは冬に南下する。日本では北海道や本州北部の離島で繁殖し、冬期は本州以北の海上で見られる。九州や伊豆諸島でも記録がある。
生態　海上に生息し、離島で繁殖する。海上に浮かんでおり、餌を見つけると水中に潜って魚類・イカ類などを捕る。
回収記録　本種の移動回収記録は293例で、そのうち258例が50kmを超えていた。内訳は国内放鳥国内回収が256例・国内放鳥外国回収が２例であった。

新放鳥数		31,899	羽
回収内訳	回収総数	移動回収	
国内放鳥国内回収	330	291(256)	
国内放鳥外国回収	2	2(　2)	
外国放鳥国内回収			
外国放鳥外国回収			
計	332	293(258)	
移動回収率		0.92	%
最長移動距離		2,449	km
最長回収期間		7,620	日

国内放鳥外国回収

国内放鳥外国回収の２例は北海道羽幌町天売島において放鳥されたもので、１例は1970年７月上旬に放鳥された成鳥が翌年９月にサハリンで、１例は1973年６月中旬に放鳥された雛が10年後の５月にカムチャツカでそれぞれ回収された。

国内放鳥国内回収

本種の50km以上離れた国内放鳥国内回収256例のうち、234例は日本海側に位置する北海道天売島で6・７月に放鳥されたものであった。太平洋側の放鳥地は北海道モユルリ島（6月１例）と宮城県足島（５月28例）である。天売島で放鳥した個体の回収地は、北海道根室市沖（１例）・北海道枝幸町（１例）・宮城県（６例）の8例を除きすべて日本海側であった。また、足島放鳥の回収記録32例は島根県からの１例を除きすべて本州太平洋岸からのものであった。これらのことから、日本海側と太平洋側の繁殖個体群はそれぞれ日本海沿岸・太平洋沿岸海域で越冬していることがほとんどであると考えられた。また天売島放鳥の本州海域での回収を月で分けると、１月が島根県（７例）、２月が島根県（５例）・石川県（２例）、３月が新潟県（１例）、４月が青森県（２例）となっており、島根県沖が本種の越冬南限である可能性が高いと考えられた。

図3.36a　ウトウ *Cerorhinca monocerata* の国内放鳥外国回収

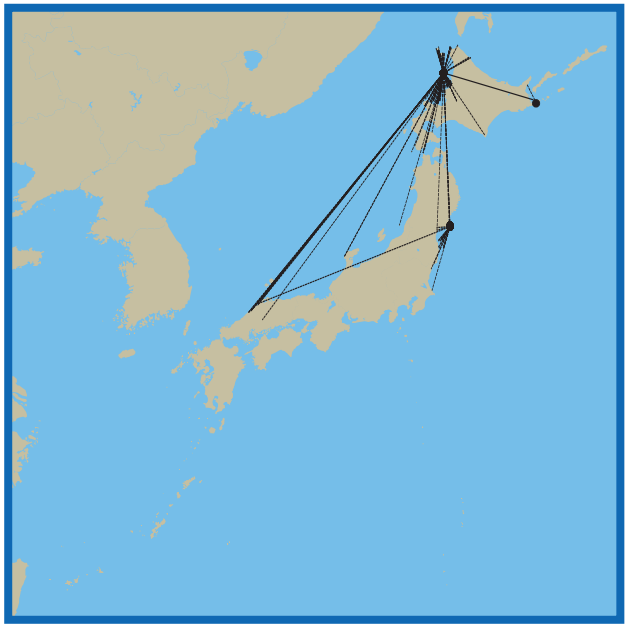


図3.36b　ウトウ *Cerorhinca monocerata* の国内放鳥国内回収

37. ショウドウツバメ　*Riparia riparia,*　Sand Martin

形態　全長約13cm。上面は暗褐色で、金属光沢はない。体下面は白く、胸に暗褐色の帯がある。尾は凹尾。嘴と足は黒い。

分布　極地を除くユーラシアおよび北アメリカで繁殖し、アフリカ・ヒマラヤ・中国南部・東南アジア・南アメリカで越冬する。日本では夏鳥として北海道に渡来し、繁殖する。本州以南では旅鳥として春秋に通過するが、個体数が多く普通に見られるのは秋である。

生態　川岸・湖岸・海岸などの崖に穴を掘って集団で繁殖する。渡りの時期には草原・アシ原・水田・湖沼畔などで見られ、大群で電線や路上で休息していることも多い。餌は小型の昆虫類で、飛翔しながら捕らえる。

回収記録　移動回収記録は20例あり、すべて国内放鳥国内回収であった。これらを１枚の地図に示した。

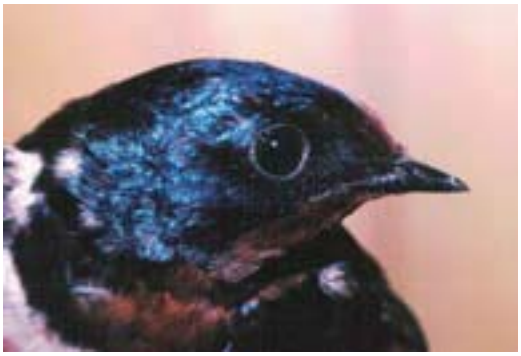
短期間に回収された記録は３例であった。1992年７月に北海道北見市で放鳥され石川県津幡町で回収された例では、1,001kmを55日間で移動した。６ヶ月以上経過した回収17例のうち15例は北海道の繁殖地で放鳥され、１～４年後に北海道内の７～80km離れた別の繁殖地で回収された。北海道七飯町で渡りの途中に標識され、翌年の繁殖期に北海道苫小牧市の集団繁殖地で回収された例があった。また栃木県藤岡町・新潟県寺泊町で渡りの途中に放鳥された２例では、それぞれ１・３年後の渡りの時期に群馬県伊勢崎市・石川県津幡町で回収されていた。

本種の越冬地は東南アジアと考えられるが、国外からの回収記録はなく越冬地は不明である。

新放鳥数		12,482	羽
回収内訳	回収総数	移動回収	
国内放鳥国内回収	24	20	
国内放鳥外国回収			
外国放鳥国内回収			
外国放鳥外国回収			
計	24	20	
移動回収率		0.16	%
最長移動距離		1,001	km
最長回収期間		1,477	日

図3.37　ショウドウツバメ *Riparia riparia* の回収記録

38. ツバメ *Hirundo rustica,* House Swallow



形態　全長約17cm。上面は黒で、藍色の金属光沢がある。額と喉は赤褐色で胸には黒い帯がある。腹以下の体下面は白い。尾は深い燕尾。嘴と足は黒い。

分布　北部を除くユーラシア・アフリカ北部・北部を除く北アメリカで繁殖し、アフリカ南部・インド・東南アジア・ニューギニア・南アメリカで越冬する。日本では夏鳥として北海道南部以南に渡来し、繁殖する。本州中部以南では少数が越冬し、南西諸島では主に旅鳥。

生態　市街地・農耕地・河川敷。人家や店舗の軒先に営巣する。餌およびその捕らえ方はショウドウツバメと同じ。

回収記録　移動回収記録233例のうち、外国放鳥外国回収９例（日本のバンディングセンターを経由したため）を除いた224例を３枚の地図に示した。

新放鳥数		148,932	羽
回収内訳	回収総数	移動回収	
国内放鳥国内回収	207	146	
国内放鳥外国回収	50	50	
外国放鳥国内回収	28	28	
外国放鳥外国回収	10	9	
計	295	233	
移動回収率		0.13	%
最長移動距離		6,322	km
最長回収期間		2,285	日

国内放鳥外国回収

本種の国内放鳥外国回収50例のうち、ほとんどは東南アジアからのものであり、特に８割にあたる40例がフィリピンからの回収であった。東南アジアでの回収時期は、月別に見ると９月：３例・10月：10例・11月：７例・12月：11例・１月：４例・２月：３例・３月：４例・４月：４例・５月：１例と、秋から冬に多くなっていた。

ロシア回収の１例は越冬期である２月に茨城県において放鳥され、同年５月にサハリンで回収されたものである。中国からの記録は２例とも２年半以上経過した後の回収で、短期間で大陸に移動した記録は今のところ得られていない。また近年タイにおいて本種の標識調査が行われているが、日本からの回収はない。このことから、日本で繁殖するツバメの個体群は主にフィリピン・インドネシア・マレーシア・ベトナム南部等で越冬するものと考えられる。

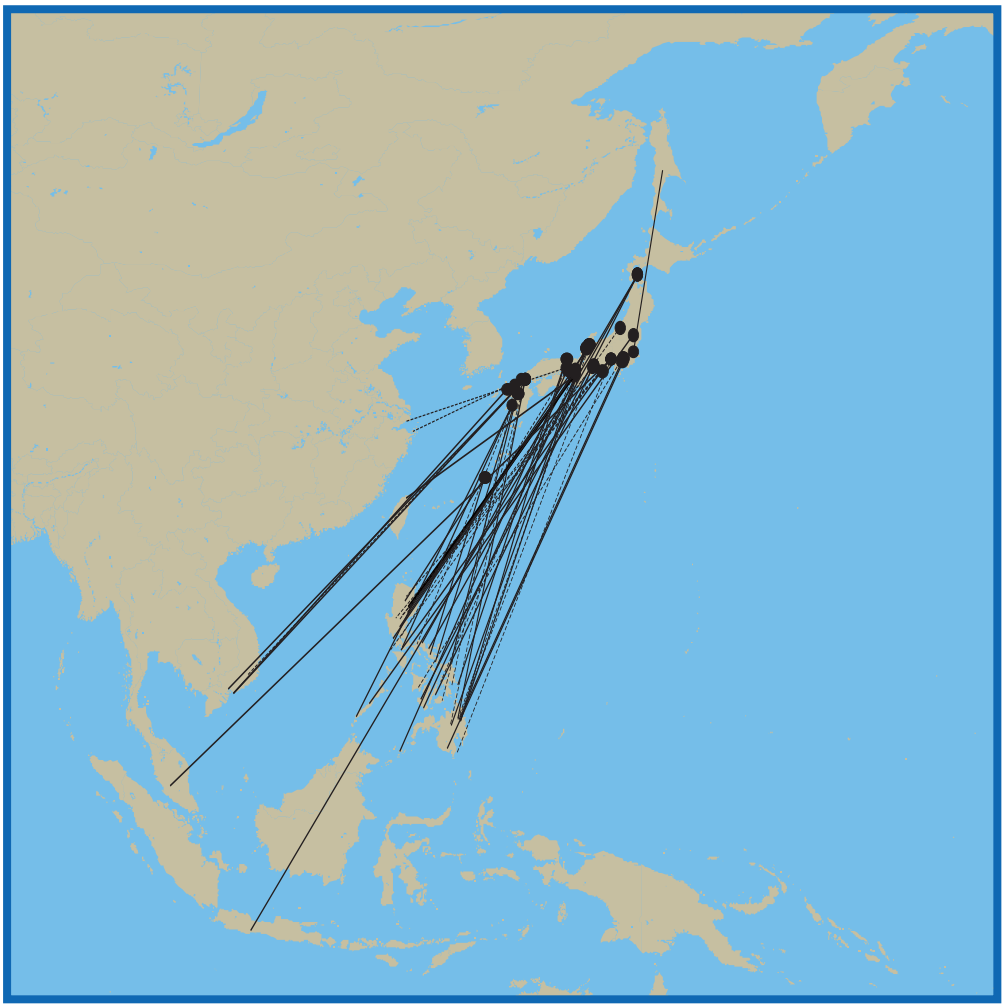


図3.38a　ツバメ *Hirundo rustica* の国内放鳥外国回収

外国放鳥国内回収

外国放鳥国内回収の内訳を表に示した。28例のうち27例は台湾放鳥で、すべて２～４月・９～10月に放鳥されており、おそらく春秋の渡りの時期に放鳥されたものであろうと考えられた。このことから、台湾は日本に渡来する本種の重要な中継地になっているものと考えられる。残りの１例は1966年の10月にマレーシアで放鳥され、翌年の５月に北海道で回収されたものであった。

放鳥地	回収地	回収数	短期間回収数
台　湾	東　北	2	0
	関　東	1	0
	中　部	3	1
	近　畿	2	1
	中　国	7	2
	四　国	5	0
	九　州	7	3
マレーシア	北海道	1	0

国内放鳥国内回収

国内放鳥国内回収207例のうち移動回収記録146例を図示した。このうち、短期間回収は53例であった。本種は主に夏鳥として日本に渡来するが、一部は国内で越冬している。回収記録の中にも、繁殖地は不明であるが越冬期に回収された例が複数あった。

放鳥地	回収地								
	北海道	東　北	関　東	中　部	近　畿	中　国	四　国	九　州	計
北海道	1(1)								1(1)
東　北	1(0)							1(0)	2(0)
関　東			22(7)	3(1)					25(8)
中　部			3(0)	47(20)	3(2)	2(2)	2(2)		57(26)
近　畿					6(3)		1(0)	1(1)	8(4)
中　国						25(6)		7(3)	32(9)
四　国									0(0)
九　州	1(0)	1(0)	2(0)	1(0)	1(0)	3(1)	1(0)	11(4)	21(5)
計	3(1)	1(0)	27(7)	51(21)	10(5)	30(9)	4(2)	20(8)	146(53)

図3.38b　ツバメ *Hirundo rustica* の外国放鳥国内回収

図3.38c　ツバメ *Hirundo rustica* の国内放鳥国内回収

参考

外国放鳥外国回収９例の内訳は以下のとおり。

- 1966-1972年の11-２月にタイのバンコクで放鳥され、1970-1972年の３-５月に朝鮮民主主義人民共和国で回収された６例
- 1966年11月にマレーシア中部で放鳥され、1971年７月に朝鮮民主主義人民共和国で回収された１例
- 1989年６月にロシアのバイカル湖東部で放鳥され、1992年１月にタイのバンコクで回収された１例
- 1994年１月にインドネシアのジャワ島で放鳥され、40日後にベトナムの中部で回収された１例

39. イワツバメ *Delichon urbica,* House Martin

形態　全長約13cm。頭部･背は黒で、藍色の金属光沢がある。翼は黒褐色で腰は白い。体下面は汚白色。尾は凹尾で嘴と足は黒い。

分布　北部および南部を除くユーラシア・アフリカ北部で繁殖し、サハラ砂漠以南のアフリカ・インド・東南アジア・中国南部で越冬する。日本では夏鳥として九州以北に渡来し、繁殖する。本州中部以南では少数が越冬する。

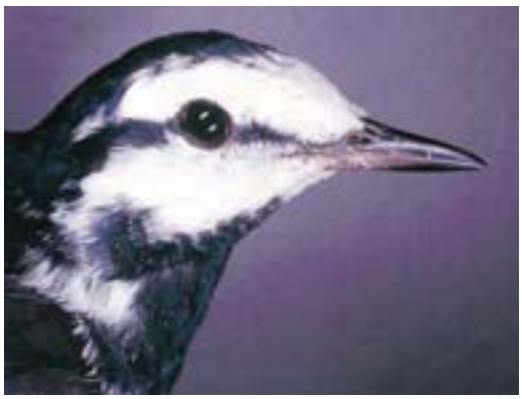
生態　平地から山地の農耕地、河川敷などの開けた場所の生息し、ホテルや橋桁といったコンクリート製建造物・岩場などに集団で営巣する。餌およびその捕らえ方はショウドウツバメと同じ。

回収記録　移動回収記録28例を図示した。1967年12月下旬に福岡県筑紫野市で放鳥された成鳥は、わずか１日後に148km離れた宮崎県延岡市で回収された。この例は本種の最も短期間の回収であるばかりでなく、最も遠距離の回収でもあった。本種は主に夏鳥として日本に渡来し、少数が九州等で越冬するが、この記録も越冬期の移動を示すものである。

新放鳥数		24,924	羽
回収内訳	回収総数	移動回収	
国内放鳥国内回収	30	28	
国内放鳥外国回収			
外国放鳥国内回収			
外国放鳥外国回収			
計	30	28	
移動回収率		0.11	%
最長移動距離		148	km
最長回収期間		1,845	日

図3.39　イワツバメ *Delichon urbica* の回収記録

40. ハクセキレイ　*Motacilla alba,*　White Wagtail



形態　全長約21cm。雄夏羽は額が白く、頭上と過眼線及び背・喉から胸にかけて黒い。翼は黒と白。尾は長く、黒くて外側２対に白斑がある。嘴と足は黒い。雌夏羽は黒色部が灰色がかり、光沢がない。背はほとんど灰色。冬羽は雌雄とも黒色部の範囲が狭くなり、灰色味が強くなる。

分布　ユーラシアのほぼ全域、アラスカ半島・グリーンランドで繁殖し、北方のものは冬期北アフリカ･アラビア半島･東南アジアに渡る。日本では九州以北で繁殖するほか、冬鳥として全国に渡来する。北のものは冬期移動する。

生態　海岸・農耕地・河原・水田などの開けた場所に生息し、街路樹・橋桁・工場などに集団で塒をとる。歩きながら尾をよく上下に振る。餌は主に小型の昆虫類。

回収記録　本種の回収記録は417例あり、移動回収記録はそのうち378例であった。しかし、10km未満の地点からの回収の多くは塒での標識調査において得られた塒間のものであるため、10km未満の記録を除いた152例について解析を行った。152例のうち国内放鳥国内回収121例については、1960年代・1970年代・1980年代・1990年代と年代ごとに分けて図示し、国内放鳥外国回収31例は別の図に示した。

新放鳥数		57,397	羽
回収内訳	回収総数	移動回収	
国内放鳥国内回収	386	347	
国内放鳥外国回収	31	31	
外国放鳥国内回収			
外国放鳥外国回収			
計	417	378	
移動回収率		0.66	%
最長移動距離		2,630	km
最長回収期間		3,267	日

国内放鳥外国回収

国内放鳥外国回収の31例は、すべて国内において11月から４月の越冬期に放鳥され、ロシアから回収されたものであった。回収の内訳はサハリンからが最多で26例（１月１例・４月から９月23例・11月１例・不明１例）、次いでカムチャツカ州２例（５月・７月各１例）南千島（エトロフ島）２例（６月・７月各１例）・ハバロフスク１例（６月）であった。

年代別に見ると本種の外国回収（主に繁殖期）は1970年代に多く24例（83.9％）得られ、1980年代は４例、1990年代は１例のみであった。これは、1960～1970年代の愛知県の冬塒における放鳥数が極めて多かったことによると思われる。

大陸からの唯一の回収である、ハバロフスクにおいて６月に回収された個体の放鳥地は、福岡県久留米市である。ハバロフスクは本種の亜種ホオジロハクセキレイ*Motacilla alba leucopsis*の繁殖分布域であるため、この個体はホオジロハクセキレイである可能性がある。ただし、国内放鳥国内回収の図に示されるように、久留米市の冬塒で放鳥された個体の回収地には北海道（４例）や秋田県、石川県（各１例）などもあり、これらは亜種ハクセキレイ*M. a. lugens*である。

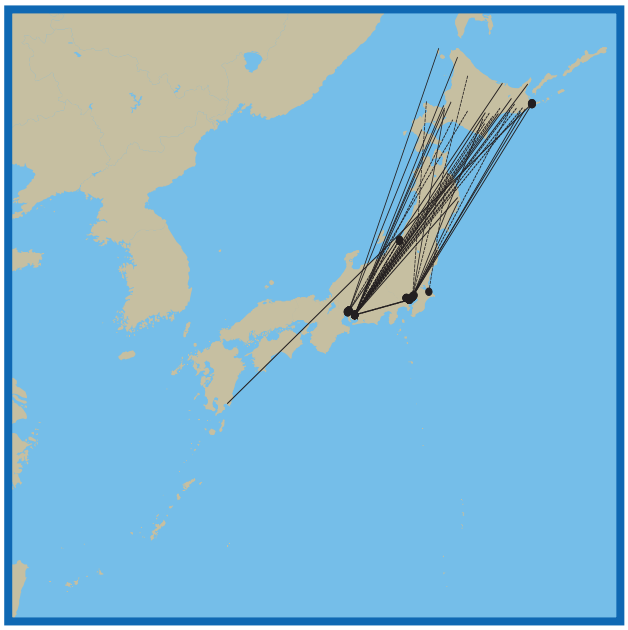
図3.40a　ハクセキレイ *Motacilla alba* の国内放鳥外国回収

国内放鳥国内回収

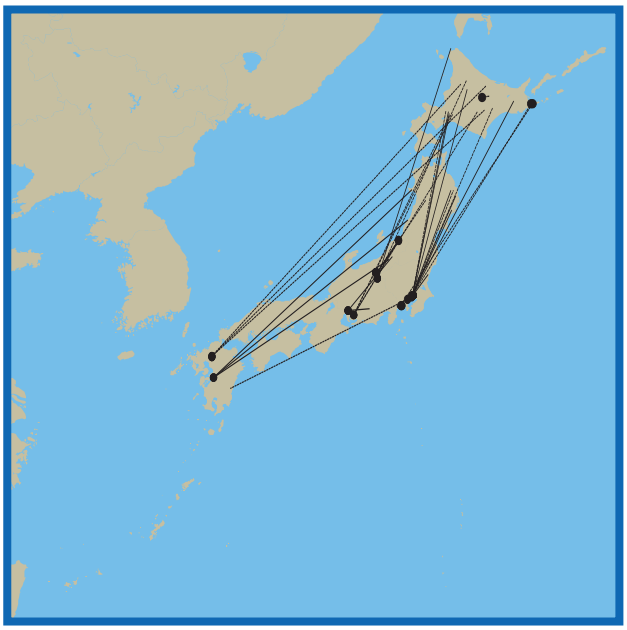
10km以上離れた回収記録121例を年代別に区分し、下図に示した。1960年代の回収記録は北海道からだけで、４月と５月に各１例、合計２例が得られている。しかし、1970年代には北海道（４～９月に27例）のほか、本州の東北（４～９月に５例）・関東（１～６月に120例、９～12月に73例）・北陸（４・10月に各１例）・近畿（１～３月に12例・11・12月に10例）・九州（10月に１例）でも回収記録が得られるようになった。さらに1980年代には、北陸からの６月の２例を含み、本州の中部からも４例（１月に３例・12月に１例）の回収記録が得られ、1990年代には中部地方から５月、近畿地方からも６月の回収期録が各１例得られた。回収数が1970年代に多いのは、放鳥数が多かったためであろう。

本種は日本では北海道・本州中部以北・佐渡・九州北部では留鳥で、本州西部・伊豆諸島・四国・九州南部・南西諸島では主に冬鳥であるが、北海道と本州北部では一部は夏鳥である。日本ではかつては北海道と本州北部で主に夏鳥として繁殖していたが、1970年代初頭より本州中部以南の平地で普通に繁殖するようになり、繁殖分布が本州西部・九州北部に急速に広がった種である。この分布の拡大は、回収記録にも示されている。

1967－1969年



1970－1979年



1980－1989年

1990－1995年

図3.40b　ハクセキレイ *Motacilla alba* の国内放鳥国内回収

41. モズ　*Lanius bucephalus,*　Bull-headed Shrike

形態　全長約20cm。雄は額から頭上が茶褐色で、黒い過眼線がある。背は灰色。翼は黒褐色で、初列風切基部には白斑があり、止まっていても目立つ。尾は長く、灰黒色。喉から胸は淡い褐色で、胸以下の下面は橙褐色。嘴と足は黒い。雌は過眼線が褐色で、胸・腹・脇に波形をした黒褐色の斑がある。初列風切基部の白斑は小さいか、ない。

分布　サハリン・ウスリー・中国北東部および甘粛省・朝鮮半島で繁殖し、北方のものは冬期南に渡る。日本ではほぼ全国で繁殖するが、積雪地のものは冬期暖地に移動する。

生態　公園・明るい林・林縁・農耕地などに生息する。枝先に止まり、尾をよく円を描くように振る。餌は主に昆虫類・両生類・は虫類などの他、魚類・ほ乳類・鳥類など多岐に渡る。初秋から、キィーキィーキィーキィーキィーとよく鳴き、これは高鳴きと呼ばれる。

回収記録　本種の移動回収記録は19例で、すべて国内放鳥国内回収であった。短期間かつ長距離の回収例として、北海道で繁殖期（5月）に放鳥された雌成鳥が、同年10月に1,500km離れた宮崎県高鍋町で回収された例があった。北海道で繁殖期および秋の渡りの時期に放鳥され、他の場所で回収された８例のうち、秋に道南で回収された２例を除いたすべてが本州以南へ移動していた（いずれも移動距離600km以上）。回収は10～1月で、秋の渡りの途中、もしくは越冬地への移動であろうと考えられる。本州では、長野県佐久市で５月に雛で放鳥された個体が、翌年１月に越冬地の静岡県富士宮市で回収された（移動距離90km）。長距離移動の他の例として、秋の渡りの時期に新潟県で放鳥された個体が、越冬期に回収された記録が４例（山口県１例・長崎県１例・熊本県２例）得られた。また、繁殖地への移動例として、秋に新潟県で放鳥され翌年の春または１年後の繁殖期に北海道へ移動した例が２例得られた。

新放鳥数		17,384	羽
回収内訳	回収総数	移動回収	
国内放鳥国内回収	27	19	
国内放鳥外国回収			
外国放鳥国内回収			
外国放鳥外国回収			
計	27	19	
移動回収率		0.11	%
最長移動距離		1,501	km
最長回収期間		2,964	日

図3.41　モズ *Lanius bucephalus* の回収記録

42. ノゴマ *Luscinia calliope,* Siberian Rubythroat

形態　全長約16cm。雄は全体に褐色で、赤い喉が目立つ。目先は黒く、白い眉斑と顎線がある。嘴は黒く、足は肉色。雌は喉が白い。目先は黒褐色。
分布　シベリアからカムチャツカ・千島・サハリン・北海道・中国北部で繁殖し、冬期はインド東部・東南アジア・台湾・フィリピンに渡る。日本では夏鳥として主に北海道で繁殖し、旅鳥とし秋と春に全国を通過する。岩手県早池峰山で繁殖記録があり、南西諸島では越冬するものもある。
生態　繁殖地では草地、潅木林に、渡りの途中には藪・暗い林・竹林・農耕地などに生息する。さえずるときは表に出てくるが、それ以外はあまり姿を見せない。餌は昆虫類・クモ類など。
回収記録　本種の移動回収記録は17例あり、そのうち国内放鳥国内回収が16例、外国放鳥国内回収が１例であった。これを図に示した。

新放鳥数		18,837	羽
回収内訳	回収総数	移動回収	
国内放鳥国内回収	18	16	
国内放鳥外国回収			
外国放鳥国内回収	1	1	
外国放鳥外国回収			
計	19	17	
移動回収率		0.08	%
最長移動距離		2,535	km
最長回収期間		1,740	日

外国放鳥国内回収

外国放鳥国内回収の１例は、ロシアのカムチャツカ州で放鳥され、47日後に2,535km離れた東京都田無市で回収されたものである。１日当たり少なくとも約54km移動したことになる。

本種は北海道以北で広く繁殖し、北海道では９月下旬から10月上旬に渡りの最盛期を迎える。越冬地は九州南部以南であると考えられるが、東南アジアからの回収記録は未だに得られていない。

国内放鳥国内回収

国内放鳥国内回収のうち15例は北海道で９・10月に、１例は新潟県で放鳥された。放鳥後その年の秋の渡りの時期（９～11月）の回収は９例、越冬期（12～２月）の回収は鹿児島県山川町の１例であった。また翌年の春の渡りの時期（４・５月）に回収されたものは富山県入善町の３例で、残り４例は１～５年後に回収された。

図3.42a　ノゴマ *Luscinia calliope* の外国放鳥国内回収

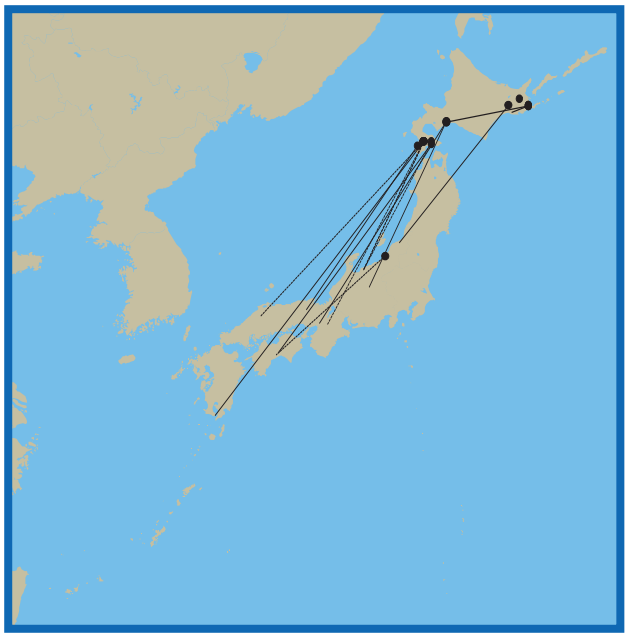


図3.42b　ノゴマ *Luscinia calliope* の国内放鳥国内回収

43. クロツグミ　*Turdus cardis,*　Grey Thrush

形態　全長約21.5cm。雄は頭部・体上面・胸が黒く、腹以下の下面は白くて脇には三角形の黒斑がある。目の周囲の皮膚は裸出して黄色い。嘴と足は黄色。雌は上面がオリーブ褐色で、下面は白く黒褐色の斑がある。脇は橙褐色。冬羽の嘴は黒くなる。
分布　日本・中国中部で繁殖し、中国南部からインドシナ北部で越冬する。日本では夏鳥として九州以北に渡来し、繁殖する。本州南西部以南では少数が越冬することがある。
生態　主に低山から山地の林に生息する。餌は昆虫類・クモ類・ミミズなど。
回収記録　本種の移動回収記録は20例であった。国内放鳥国内回収19例のうち近距離（50kmまで）の回収を除いた11例と、国内放鳥外国回収１例をそれぞれ１枚の図に示した。

新放鳥数		12,134	羽
回収内訳	回収総数	移動回収	
国内放鳥国内回収	20	19	
国内放鳥外国回収	1	1	
外国放鳥国内回収			
外国放鳥外国回収			
計	21	20	
移動回収率		0.16	%
最長移動距離		3,847	km
最長回収期間		1,817	日

国内放鳥外国回収

本種の外国回収は図示した１例が知られているだけである。10月に北海道苫小牧市で放鳥された雌・幼鳥が98日後に中国海南島で回収されたもので、距離は3,847kmであった。１日当たり約40km移動したことになる。放鳥地はこの個体の繁殖地とは限らないが、北海道より北のサハリンなどで本種の記録は少なく繁殖記録もない。これは本例が、北海道で繁殖する個体に海南島で越冬するものがあることを示唆している。

国内放鳥国内回収

国内における本種の移動の経路には、北海道南西部を中継して日本海沿いに渡るものがあることを示唆している。本州太平洋岸沿いの移動については回収例が少なく不明であるが、おそらく北海道で繁殖する個体群の多くは日本海沿岸を移動するものと考えられる。短期間回収記録から春と秋の渡りの移動速度を比較してみた。４月下旬に新潟県新潟市で放鳥され５月上旬に北海道千歳市で回収された例では577kmを１日に約33km、９月下旬に北海道苫小牧市で放鳥され10月中旬に新潟市で回収された例では560kmを１日に約32km移動しており、この2例では春と秋の移動の速度に著しい差はなかった。

図3.43a　クロツグミ *Turdus cardis* の国内放鳥外国回収

図3.43b　クロツグミ *Turdus cardis* の国内放鳥国内回収

44. アカハラ *Turdus chrysolaus,* Brown Thrush

形態　全長約23.5cm。雄成鳥は頭部が暗褐色、体上面と胸はオリーブ褐色。胸・腹・脇はオレンジ色で、腹中央と下尾筒は白い。上嘴は黒く、下嘴は淡いオレンジ色。足は黄色。雄幼鳥と雌は雄よりも色が淡く喉に褐色の縦斑があるが、変異が大きい。
分布　サハリン･南千島･日本東部で繁殖し、日本西部･台湾･中国南部・フィリピンで越冬する。日本では夏鳥として本州中部以北で繁殖し、本州中部以南で越冬する。
生態　平地から山地の林に生息する。冬は公園の林などでも見られる。餌は昆虫類・クモ類・ミミズなど。
回収記録　本種の移動回収記録は25例あり、国内放鳥国内回収20例と、国内放鳥外国回収４例に外国放鳥国内回収１例を加えたものを２図に分けて示した。

新放鳥数		16,145	羽
回収内訳	回収総数	移動回収	
国内放鳥国内回収	21	20	
国内放鳥外国回収	4	4	
外国放鳥国内回収	1	1	
外国放鳥外国回収			
計	26	25	
移動回収率		0.15	%
最長移動距離		3,710	km
最長回収期間		1,164	日

国内放鳥外国回収・外国放鳥国内回収

本種の国内放鳥外国回収は4例が知られ、放鳥地はすべて北海道、回収地はフィリピンのルソン島（３例）・台湾の紅頭嶼（１例）であった。いずれも放鳥は秋の渡りの時期（９･10月）で、放鳥地は繁殖地とは限らないが、回収はフィリピンが12・２・４月、台湾が12月なので、越冬地からのものと考えられる。

一方外国放鳥国内回収の１例は、1966年４月中旬に台湾の台中で放鳥され、同年11月下旬に宮崎県田野町で回収されたものである。放鳥地は越冬地の可能性があるが、回収地はおそらく渡りの中継地であろう。

国内放鳥国内回収

国内放鳥国内回収のうち最も長距離の移動例は、北海道羽幌町で10月中旬に放鳥され、翌年５月上旬に兵庫県香住町で回収されたもので、移動距離は1,146kmであった。また北海道根室市で10月中旬に放鳥された２例は、それぞれ翌年の12月上旬に千葉県東庄町、５月上旬に石川県金沢市で回収された。この両例は放鳥地からそれぞれ927kmと1,055km離れていた。これらの回収記録はすべて秋の渡りの時期における北海道での放鳥であり、放鳥地が実際の繁殖地とは限らない。

図3.44a　アカハラ *Turdus chrysolaus* の国内放鳥外国回収・外国放鳥国内回収

図3.44b　アカハラ *Turdus chrysolaus* の国内放鳥国内回収

45. シロハラ　*Turdus pallidus,*　Pale Thrush

形態　全長約25cm。雄成鳥は頭部が灰褐色で、体上面はオリーブ褐色。胸・腹は灰褐色、脇はオリーブ褐色で、腹中央と下尾筒は白い。尾羽は黒褐色で外側尾羽には白斑があり、飛んだときに目立つ。上嘴は黒く、下嘴は淡橙色。足は淡橙色。雄幼鳥と雌は頭部の灰色味が淡く、喉は淡褐色で褐色の縦斑があるが、アカハラ同様変異が大きく、雌雄の区別が難しい個体もいる。

分布　ウスリー・アムール川下流域で繁殖し、朝鮮半島・日本・台湾・中国南東部で越冬する。日本では冬鳥として全国に渡来し、特に本州中部以南に多い。広島県で繁殖記録があり、対馬では巣立ち雛の観察例がある。

生態　平地から低山の林に生息する。下部植生の発達した薄暗い林を好む。餌は昆虫類・クモ類・ミミズなど。

回収記録　本種の移動回収記録は18例あり、いずれも国内放鳥国内回収であった。県外の短期間回収は全部で11例あり、このうち長距離移動した例は、北海道苫小牧市から29日後に千葉県長南町（806km）・46日後に岡山県旭町（1,072km）、富山県婦中町から58日後に兵庫県龍野市（306km）・68日後に山口県岩国市（535km）・108日後に鳥取県日野町（365km）、福井県織田町から133日後に島根県六日市町（207km）・102日後に岡山県日生町（207km）、新潟県新潟市から133日後に福井県敦賀市（367km）があった。またこれらの回収例ではすべて放鳥が10月中旬から11月上旬、回収が11月下旬から翌年の２月までであったことから、渡りの中継地から越冬地への移動の途中であったと考えられる。

長期経過後の回収例も含めると、北海道苫小牧市から兵庫県龍野市・山口県岩国市への移動、富山県婦中町から北海道苫小牧市・石川県七塚町・福井県織田町・兵庫県龍野市・鳥取県日野町・山口県岩国市への移動、福井県織田町から鳥取県西伯町・鳥取県岩美町・島根県六日市町・岡山県日生町・山口県光市への移動が確認された。また新潟県粟島浦村から徳島県神山町、新潟県新潟市から福井県敦賀市、静岡県小山町から山梨県八代町への移動も確認された。

新放鳥数		23,869	羽
回収内訳	回収総数	移動回収	
国内放鳥国内回収	25	18	
国内放鳥外国回収			
外国放鳥国内回収			
外国放鳥外国回収			
計	25	18	
移動回収率		0.08	%
最長移動距離		1,072	km
最長回収期間		2,362	日

図3.45　シロハラ *Turdus pallidus* の回収記録

46. ウグイス *Cettia diphone,* Bush Warbler

形態　全長約14～15.5cm。雄は雌よりやや大きい。全身が緑色がかった褐色で、淡褐色の眉斑がある。下面はやや淡い。尾羽は長めで、10枚（スズメ目鳥類は通常12枚）。嘴は黒褐色で、下嘴は黄褐色みがある。足は肉色。

分布　ウスリー・中国東北部・朝鮮半島・サハリン南部・南千島・日本で繁殖し、日本・台湾・中国南東部・フィリピン北部で越冬する。日本では全国で繁殖し、本州から九州では冬は低地や暖地に移動する。北海道では夏鳥。南西諸島では主に冬鳥だが、北部では繁殖するものもある。

生態　平地から山地の林に生息する。林床にササのある所を好む。冬はやぶのある公園や人家の庭などにもいる。ホーホケキョとさえずる。古くより人々に親しまれ、よく飼われてきた。詩歌の題材として取り上げられることも多い。餌は昆虫類・クモ類などが主であるが、餌台においた熟したカキの実をついばむこともある。

回収記録　本種の移動回収記録は27例あり、すべて国内放鳥国内回収である。

本種の放鳥と回収の記録は、ほとんどが春または秋の移動の時期のものである。北海道で放鳥または回収された例は、道内放鳥道内回収の３例を除いて５例あり、いずれも北海道と秋田県・山形県・新潟県・福井県の日本海沿岸間のものである。また、日本海沿岸の秋田県・山形県・新潟県・富山県・石川県・福井県・京都府・島根県・福岡県・長崎県の各府県間の回収が多く得られており、本種が主に日本海沿岸と東シナ海沿いに渡ることを示している。太平洋沿岸の移動については今のところ不明であるが、日本海沿岸のような顕著な移動は認められていない。

新放鳥数		49,481	羽
回収内訳	回収総数	移動回収	
国内放鳥国内回収	32	27	
国内放鳥外国回収			
外国放鳥国内回収			
外国放鳥外国回収			
計	32	27	
移動回収率		0.05	%
最長移動距離		2,197	km
最長回収期間		756	日

図3.46　ウグイス *Cettia diphone* の回収記録

47. オオセッカ *Locustella pryeri*, Japanese Marsh Warbler

形態　全長約14cm。上面は淡褐色で、黒褐色の太い縦斑がある。下面は淡色で、脇は褐色味が強い。尾は褐色で長く、くさび型。嘴は黒褐色で下嘴基部は肉色、白く不明瞭な眉斑があり、足は肉色。

分布　ウスリー・日本・中国東北部で繁殖し、日本・中国中東部で越冬する。日本では現在、青森県・秋田県・茨城県・千葉県で局地的に繁殖し、冬は関東以南の湿地に移動する。

生態　海岸や川沿いの湿った湿原に生息する。茂みの中に隠れていてなかなか出てこないが、繁殖期には雄はジュクジュクジュク…とさえずりながら放物線を描いて飛ぶ。

回収記録　本種の移動回収記録は12例あり、すべて国内放鳥国内回収であった。すべてを図示したが、うち３例は放鳥地と回収地が重複しているため、図では９例しか表示されていないように見える。

青森県仏沼で夏鳥として繁殖する個体群は、茨城県神栖町で3例、千葉県東庄町で２例の計５例の回収があり、利根川下流域で越冬することが確認されている。一方、利根川下流域の神栖町で繁殖する個体群には、静岡県沼津市・愛知県田原町・愛知県弥富町で越冬するものがあることが各１例の回収から確認されている。また、利根川下流域の千葉県小見川町で８月上旬に放鳥された幼鳥が同年の12月上旬に千葉県木更津市で回収された例や、茨城県桜川村で10月中旬に放鳥された幼鳥が同年11月上旬に千葉県成田市で回収された例がある。神栖町で繁殖する個体群の一部には、冬期も同地に留鳥としてとどまるものもあることが標識調査により確認されている。なお、繁殖期の移動の例として、神栖町で５月下旬に放鳥された雄成鳥が、19日後に千葉県成田市で回収された例があるが、回収地である印旛沼では現在のところ繁殖は確認されていない。

新放鳥数		1,813	羽
回収内訳	回収総数	移動回収	
国内放鳥国内回収	12	12	
国内放鳥外国回収			
外国放鳥国内回収			
外国放鳥外国回収			
計	12	12	
移動回収率		0.66	%
最長移動距離		556	km
最長回収期間		371	日
絶滅危惧ⅠB類			
国内希少野生動植物種			

図3.47　オオセッカ *Locustella pryeri* の回収記録

48. コヨシキリ *Acrocephalus bistrigiceps,* Black-browed Reed Warbler

形態　全長約13.5cm。上面はオリーブ茶褐色で、白い眉斑があり、その上には黒褐色の明瞭な線がある。下面は淡褐色で、胸と脇は黄褐色味が強い。尾は褐色で長く、くさび型。嘴は黒褐色で下嘴基部は黄色みがかり、足は肉色。

分布　ウスリー・サハリン・日本・朝鮮半島・中国東北部および東部で繁殖し、中国南部・タイ・ミャンマーで越冬する。日本では夏鳥として北海道・中部以北の本州、九州に局地的に渡来し、繁殖する。

生態　平地から山地の草原・湿原に生息する。繁殖期に雄はアシの茎などに止まり、ジッピリリジッピリリチュチュチュピリリ…と高い声で長時間さえずる。

新放鳥数		26,718	羽
回収内訳	回収総数	移動回収	
国内放鳥国内回収	24	22	
国内放鳥外国回収			
外国放鳥国内回収			
外国放鳥外国回収			
計	24	22	
移動回収率		0.08	%
最長移動距離		1,127	km
最長回収期間		2,422	日

回収記録　本種の移動回収記録は22例あり、すべて国内放鳥国内回収であった。短期間回収はこのうち13例であった。

北海道南部と島根県間の回収は２例、茨城県と山口県間は２例、茨城県と島根県間は５例あるが、図ではそれぞれ線が重なっているため、回収数と線の本数は一致していない。繁殖地からの移動を示す回収は、青森県から山口県、茨城県から山口県、茨城県から島根県、栃木県から島根県、埼玉県から兵庫県などがあげられる。北海道南部での放鳥記録はいずれも８月中旬以降であり、より北で繁殖していた通過個体の可能性がある。一方、11～４月の越冬期の回収記録は得られておらず、越冬地からの回収が期待される。ただし、本種の回収は１例を除きいずれも標識調査時の再捕獲によっており、越冬地での調査が実施されないと、回収記録を得ることは困難と考えられる。

移動速度に関しては、秋の渡りで石川県から島根県までの283kmを２日間で渡った例が最も早く、１日当たり141kmと計算される。長距離移動では、北海道南部から島根県までの978kmを11日間で移動した例（１日当たり88km）がある。

図3.48　コヨシキリ *Acrocephalus bistrigiceps* の回収記録

49. オオヨシキリ *Acrocephalus arundinaceus,* Great Reed Warbler

形態　全長約18.5cm。上面はオリーブ褐色で、淡褐色の眉斑がある。下面は淡褐色で、胸に不明瞭な灰褐色の縦斑がある。尾は長く、角型。嘴は長くて黒く、下嘴基部は肉色。足は頑丈で、肉色や青灰色など変異がある。

分布　ヨーロッパ（イギリス・スカンジナビア・アイスランドを除く）と、中央アジア・アフリカ北部やアムールから中国東部・日本で繁殖し、アフリカ南東部・インドシナ・フィリピン・ボルネオなどで越冬する。日本では夏鳥として全国に渡来し、繁殖する。

生態　平地から山地の川岸や湖沼などのアシ原に生息する。繁殖期に雄はアシの先端・木の枝・電線などに止まり、ギョギョシギョギョシと大きな声でさえずる。その声から「行々子」と呼ばれ、俳句などに詠まれてきた。

回収記録　本種の移動回収記録は32例であった。国内放鳥国内回収23例、国内放鳥外国回収5例と外国放鳥国内回収４例をあわせたものを２図に分けて示した。

新放鳥数		25,576	羽
回収内訳	回収総数	移動回収	
国内放鳥国内回収	30	23	
国内放鳥外国回収	5	5	
外国放鳥国内回収	4	4	
外国放鳥外国回収			
計	39	32	
移動回収率		0.11	%
最長移動距離		3,625	km
最長回収期間		2,198	日

国内放鳥外国回収・外国放鳥国内回収

外国放鳥国内回収は２例が短期間回収で、いずれも香港で４月下旬に放鳥され、21日後に鳥取県で、65日後に長野県でそれぞれ回収されたものである。越冬地を示す回収はフィリピンの１例だけである。香港では多くの回収および放鳥記録が得られているが、これらはいずれも春と秋の渡り時期の記録であり、これらの個体の越冬地はさらに南であることを示唆している。移動速度に関しては、春の渡りで香港から鳥取県までの2,363kmを21日間で渡った例が際だって速く、１日当たり112km以上と計算される。

国内放鳥国内回収

国内放鳥国内回収23例のうち６例が短期間の回収であった。このうち多くは、千葉県・石川県・長野県などで繁殖している個体が、山口県や福岡県を経由していることを示している。

図3.49a　オオヨシキリ *Acrocephalus arundinaceus* の国内放鳥外国回収・外国放鳥国内回収

図3.49b　オオヨシキリ *Acrocephalus arundinaceus* の国内放鳥国内回収

50. ツリスガラ *Remiz pendulinus,* Penduline Tit

形態　全長約11cm。雄成鳥は頭上が灰色で、額からつながる黒くて太い過眼線がある。側胸から上背は栗色で、背と翼は黒褐色。体下面は淡褐色。嘴は長くて先端が尖り、灰色。足は黒い。雌成鳥は頭上に褐色味があり、過眼線は茶褐色。側胸の栗色部はない。幼鳥は雌成鳥に似る。

分布　ヨーロッパ・トルコ・イラン・アフガニスタンからロシア極東中部・中国東北部で繁殖し、イラクからインド北西部・中国南部・朝鮮半島で越冬する。日本では従来まれな迷鳥であったが、1970年代から多く記録されるようになり、現在では冬鳥として関東以西に渡来する。

生態　平地のアシ原に生息する。小群で行動し、アシに止まって嘴で葉鞘をはがし、内側にいるカイガラムシなどの昆虫を食べるほか、草の種子も食べる。

回収記録　本種の回収記録は149例あり、すべて移動回収記録で、国内放鳥外国回収が２例ある以外は国内放鳥国内回収であった。本種は本州西部以南で越冬することが知られていたが、近年中部・関東地方でも観察され、越冬地の拡大が注目されている。そこで国内回収については３～５年ごとに分けて図示し、国内放鳥外国回収は別の図に示した。

新放鳥数		13,598	羽
回収内訳	回収総数	移動回収	
国内放鳥国内回収	147	147	
国内放鳥外国回収	2	2	
外国放鳥国内回収			
外国放鳥外国回収			
計	149	149	
移動回収率		1.10	%
最長移動距離		1,383	km
最長回収期間		2,232	日

国内放鳥外国回収

国内放鳥外国回収は２例あり、韓国と中国から１例ずつであった。1982年12月下旬に福岡県福岡市で放鳥された個体が、1984年２月下旬に韓国で回収された。もう１例は1990年11月上旬に福岡県苅田町で放鳥された個体が、1992年５月下旬に中国吉林省で回収された。中国の回収地は本種の繁殖地の南東縁にあたり、回収時期からも繁殖地あるいはその近辺からの回収であると考えられる。これらの記録により、主に西日本で越冬分布する本種は、朝鮮半島を経由して渡来すると考えられる。

図3.50a　ツリスガラ *Remiz pendulinus* の国内放鳥外国回収

国内放鳥国内回収

本種の回収記録は1981年に初めて得られ、その後1988年までは九州から中国地方の西部に限られていた。1989年から1991年にかけては東海地方から、1995年までには関東地方でも回収されるようになった。逆に1992年から1995年にかけての４年間は九州内での回収が減少し、東に分布を広げている様子がうかがえる。

回収地＼回収年	81-85	86-88	89-91	92-95	総計
北海道					0
東北					0
関東				4	4
中部			2	22	24
近畿			1	6	7
中国	12	33	10	3	58
四国					0
九州	9	13	26	6	54
計	21	46	39	41	147

1981－1985年

1986－1988年

1989－1991年

1992－1995年

図3.50b　ツリスガラ *Remiz pendulinus* の国内放鳥国内回収

51. シジュウカラ *Parus major,* Great Tit

形態　全長約14cm。雄は額から頭上・喉、これらをつなぐ頸側は青色光沢のある黒で、頬と耳羽は白い。背と肩羽は灰緑色から灰青色。翼と尾は黒く、羽縁が青い。体下面は白く、喉から腹中央を通り下尾筒に達する黒くて太い縦線があり、下腹で特に太い。嘴と足は青灰色。雌は体下面の黒い縦線が下腹で太くならない。

分布　北緯65°以南のユーラシア･アフリカ北部に分布する。日本では小笠原諸島を除く全国に分布する。

生態　平地から山地の林・市街地の公園に生息する。広葉樹林と針広混交林を好み、針葉樹林には少ない。樹上のほか地上でも餌をあさり、昆虫およびその幼虫や卵・クモ類などのほか､木の実なども食べる。また餌台ではピーナッツ･パン・ラードなども食べる。

回収記録　本種の移動回収記録は59例あり、すべて国内放鳥国内回収であった。

秋の渡りの時期に北海道松前町で放鳥され本州以南で回収された記録は、同年10月から翌年５月までに秋田県田代町（１例）・東京都日野市（１例）・新潟県新潟市（３例）・富山県大沢野町（１例）の例があるほか、北海道苫小牧市→福島県船引町の回収が１例ある。また、青森県十和田市（１例）・新潟県新潟市（３例）・新潟県紫雲寺町（１例）･福井県織田町（１例）でそれぞれ放鳥され、北海道で回収された例がある。

本種は一般に留鳥とされているが、近年の標識調査によって北海道と本州の間を渡っている個体があることが確認された。北海道最南端の白神岬では、９～10月に大きな群れで渡るのが観察される。また本州での春の渡りは、３～４月であることが確認されている。

新放鳥数		51,531	羽
回収内訳	回収総数	移動回収	
国内放鳥国内回収	84	59	
国内放鳥外国回収			
外国放鳥国内回収			
外国放鳥外国回収			
計	84	59	
移動回収率		0.11	%
最長移動距離		942	km
最長回収期間		1,487	日

図3.51　シジュウカラ *Parus major* の回収記録

52. メジロ　*Zosterops japonicus,*　Japanese White-eye

形態　全長約12cm。上面は黄緑色で、目の周りに白い羽が輪状に生えている。体下面は汚白色で喉は黄色を帯び、脇は淡褐色。嘴と足は灰色。

分布　朝鮮半島南部・日本・台湾・中国南部・インドシナ北東部・フィリピン北部に分布する。日本では北海道中部以南に分布、繁殖するが、本州北部以北では少ない。

生態　平地から山地の林、市街地の公園に生息する。常緑広葉樹林を好む。樹上性で、葉上のアリマキなどの昆虫・クモ類などを食べ、果実・ツバキ・ウメ・サクラなどの花蜜も食べる。樹液も飲み、餌台に置いたジュースなども飲みに訪れる。

回収記録　本種の移動回収記録は56例あり、このうち短期間回収は41例であった。これらはさらに、秋（10～11月）に放鳥されその年のうちに回収されたもの20例、秋に放鳥され冬および春（1～5月）に回収されたもの17例、春放鳥され6ヶ月以内に回収された4例に分けられる。

本種の大部分は新潟県で放鳥されている。新潟県放鳥の短期間回収は計33例あり、北海道（1例）・山形県（2例）・新潟県（18例）・富山県（2例）・静岡県（1例）・愛知県（2例）・三重県（1例）・京都府（1例）・大阪府（2例）・兵庫県（1例）・鹿児島県（2例）の各県で回収されている。静岡県以南の回収月はいずれも12月以降であり、これらの地域は越冬地と考えられる。一方、繁殖地の放鳥および回収記録は得られておらず、新潟県を通過する本種の繁殖地は不明であり、今後の繁殖期の調査が期待される。

北海道からは3例の記録があり、1例は新潟県で4月に放鳥され1月後に松前郡松前町大島において回収された記録、新潟県で11月に放鳥され2年後の10月に標津郡標津町において回収された記録、もう1例は9月に札幌市で放鳥され1年5ケ月後に大阪府四条畷市において回収された記録である。

なお移動速度に関しては、新潟県から富山県までの184.7kmを6日間で移動した例が速く、1日当たり少なくとも約30kmと計算される。

新放鳥数		83,499	羽
回収内訳	回収総数	移動回収	
国内放鳥国内回収	63	56	
国内放鳥外国回収			
外国放鳥国内回収			
外国放鳥外国回収			
計	63	56	
移動回収率		0.07	%
最長移動距離		1,091	km
最長回収期間		2,520	日

図3.52　メジロ *Zosterops japonicus* の回収記録

53. コジュリン *Emberiza yessoensis,* Japanese Reed Bunting

形態　全長約14.5cm。雄夏羽は頭部が黒いのが特徴。背は赤褐色で、淡褐色と黒の縦斑がある。腰は赤褐色。腹は白く、胸と脇は淡褐色で、脇には不明瞭な縦斑がある。尾羽は淡褐色で黒い軸斑があり、外側２対に白斑がある。雌は頭上が褐色で黒い縦斑があり、淡褐色の眉斑と頬線、黒い顎線がある。頬と耳羽は褐色。雄の冬羽は全体に雌に似るが、頭部は黒味が強く、淡褐色の不明瞭な頭央線がある。嘴は繁殖期の雄では黒、それ以外は肉色で嘴峰は黒褐色。足はピンク色。

分布　中国東北部・ウスリー・日本・南千島で繁殖し、北方のものは冬期南方に渡り、朝鮮半島南部・日本・中国南東部で越冬する。日本では中部以北の本州および九州で繁殖するが、分布は局地的。本州中部以南の沿岸で越冬する。

生態　平地から山地のアシ原・草原に生息する。小型の昆虫類・クモ類などを食べる。

回収記録　本種の移動回収記録24例を図示した。

青森県六ヶ所村で10月に放鳥された個体が、11～３月に千葉県香取郡（２例）と千葉県佐倉市（２例）で回収されている。さらに青森県三沢市で10月に放鳥された個体が、11月に栃木県藤岡町（１例）と千葉県東庄町（１例）・12月に静岡県沼津市（２例）・１月に茨城県水海道市（１例）で回収され、千葉県長生村で12月に放鳥された個体が翌年10月に青森県三沢市で回収された例がある。また三沢市で７月に放鳥された雛が11月に埼玉県浦和市で回収されている。これらの回収記録は、青森県の太平洋沿岸の繁殖個体群が、栃木県･茨城県･千葉県･静岡県に渡り越冬することを示している。また青森県の日本海沿岸に位置する中里町で５月に放鳥され、同年11月に宮城県仙台市で回収された１例があり、青森県の日本海沿岸の繁殖個体が本州の太平洋沿岸に移動したことが確認された。しかし、秋田県や新潟県の日本海沿岸で局所的に繁殖する個体群の越冬地は不明である。

利根川下流域の茨城県神栖町では、同一個体が周年生息していることが確認されている。しかし、神栖町で８月に放鳥された雄・幼鳥が翌年２月に約20km離れた同県桜川村で回収された例があり、短距離を移動する個体もあることが判明している。

新放鳥数		7,089	羽
回収内訳	回収総数	移動回収	
国内放鳥国内回収	25	24	
国内放鳥外国回収			
外国放鳥国内回収			
外国放鳥外国回収			
計	25	24	
移動回収率		0.34	%
最長移動距離		672	km
最長回収期間		1,112	日
絶滅危惧Ⅱ類			

図3.53　コジュリン *Emberiza yessoensis* の回収記録

54. カシラダカ　*Emberiza rustica*,　Rustic Bunting

形態　全長約15cm。雌雄ともに短い冠羽があり、和名の由来となっている。雄夏羽は頭上、目先、耳羽が黒く、眉斑と喉、胸、腹は白い。腰は栗色で、羽縁が淡褐色なためうろこ模様となっている。胸に栗色の帯があり、脇にも栗色の縦斑がある。尾羽は黒褐色で、外側の２対に白斑がある。雄冬羽と雌は頭上が褐色で黒い縦斑があり、淡黄色の眉斑と黒い顎線がある。頬と耳羽は黒褐色。嘴は肉色で嘴峰は黒褐色。足はピンク色。

分布　スカンジナビア半島からカムチャツカ半島までのユーラシア高緯度地方で繁殖し、日本、朝鮮半島、中国東部などで越冬する。日本では冬鳥として渡来し、九州以北で越冬する。

生態　平地から山地の明るい林、耕地、川原に生息する。日本にいるときには主に植物の種子を食べるが、ほかに小型の昆虫類・クモ類なども食べる。

新放鳥数		267,031	羽
回収内訳	回収総数	移動回収	
国内放鳥国内回収	138	131	
国内放鳥外国回収	4	4	
外国放鳥国内回収			
外国放鳥外国回収			
計	142	135	
移動回収率		0.05	%
最長移動距離		2,692	km
最長回収期間		2,321	日

回収記録　本種の回収記録は142例あり、このうち移動回収記録は135例であった。またこのうち４例は外国からの回収記録であり、98例は県外からの回収記録、33例は同一県内の回収記録であった。国内放鳥国内回収は例数が多いため、県外からの回収で短期間回収の44例を、秋放鳥秋回収・秋放鳥冬回収の２枚の図に示した。

国内放鳥外国回収

国内放鳥外国回収は４例ともロシアからのもので、新潟県柏崎市→カムチャツカ（2,692km）、福井県織田町→ハバロフスク（1,859km）、滋賀県湖北町→ハバロフスク（1,450km）、新潟県豊栄市→ハバロフスク（1,299km）であった。いずれも1年以上経過後の回収であった。カムチャツカおよびハバロフスクは本種の繁殖地の南限に当たっており、上記の回収例は国内で越冬する本種の繁殖地解明のための貴重な記録である。

図3.54a　カシラダカ *Emberiza rustica* の国内放鳥外国回収

国内放鳥国内回収（短期間の秋放鳥秋回収）

本種の県外の短期間回収記録のうち、秋に放鳥（９～ 11月）され同シーズンの秋に回収されたものは渡りの移動途中と考えられ、28例あった。このうち12例は新潟県→富山県、7例は新潟県→福井県と日本海沿岸を移動する記録が多く得られたが、なかには青森県→富山県（26日間）・岩手県→新潟県（10日間）と短期間に太平洋側から日本海側へ移動する例も認められた。その他、北海道→岩手県・宮城県・茨城県・新潟県･石川県、青森県→岩手県、岩手県→宮城県の秋の渡り途中の回収記録がそれぞれ１例ずつ得られた。

県外の回収記録のうち、10日以内に回収されたものは９例あった。最も短期間の例は、新潟県柏崎市→富山県婦中町（１日、154km）で、新潟県柏崎市→富山県婦中町にはもう１例、４日の記録もあった。また新潟県豊栄市→富山県婦中町が４例（５日・９日・９日・10日、236km）あった。次いで短期間の例は青森県三沢市→岩手県盛岡市（２日、119km）で、そのほかに北海道函館市→盛岡市（10日、233km）、盛岡市→新潟県豊栄市（10日、264km）の記録があった。また同じ県内であるが、同日のうちに移動が確認できた例があった（新潟県豊栄市→新潟市佐潟、34.9km）。

国内放鳥国内回収（短期間の秋放鳥冬回収）

本種の県外の短期間回収記録のうち、秋に放鳥（９～ 11月）され同シーズンの越冬期と考えられる12月～２月に回収されたものは８例であった。このうち新潟県→栃木県・高知県、福井県→大分県の３例は日本海側から太平洋側に移動しており、本州の関東以南のどこかで横断したと考えられた。また、２例は日本海側（新潟県→富山県、富山県→石川県）、ほかの３例は太平洋側（宮城県→茨城県・静岡県、山梨県→埼玉県）の移動であった。

図3.54b　カシラダカ *Emberiza rustica* の国内放鳥国内回収（秋放鳥秋回収）

図3.54c　カシラダカ *Emberiza rustica* の国内放鳥国内回収（秋放鳥冬回収）

55. アオジ　*Emberiza spodocephala,*　Black-faced Bunting

形態　全長約15cm。雄夏羽は頭上と耳羽が暗緑灰色で、目先と喉は黒く、不明瞭な顎線がある。上面は緑灰色で、背には黒褐色の縦斑がある。胸以下の下面は淡黄色で、胸に緑灰色、脇に黒褐色の縦斑がある。尾羽は黒褐色、外側の２対に白斑があり、中央の１対は赤褐色で黒褐色の軸斑がある。雌は頭上と耳羽が黄緑褐色で褐色の斑があり、喉は淡黄色で、淡黄色の眉斑と頬線がある。上面は雄より褐色味が強く、下面は雄より黄色味が淡い。嘴は上嘴が暗褐色、下嘴は淡褐色で先端は暗褐色。足はピンク色。

分布　ロシアのアルタイ山脈西部、同じくレナ川上流からオホーツク海沿岸・アムール・南千島・サハリン・日本・モンゴル・中国東北部および南西部・朝鮮半島で繁殖し、冬期は日本・台湾・中国南部・インドシナ北部・ブータン・ネパールへ渡る。日本では本州中部以北で繁殖し、冬期は南方や平地に移動するほか、本州中部以西に冬鳥として渡来する。

生態　繁殖期は山地（北海道では平地も）の明るい林･林縁、非繁殖期は平地から低山の林縁･薮･アシ原などに生息する。植物の種子・小型の昆虫類・クモ類などを食べる。

回収記録　本種の回収記録は815例あり、そのうち795例が移動回収記録であった。移動回収記録のあった個体の、放鳥時と回収時の季節別内訳は表に示したとおりで、秋期（９～11月）が768例と最も多く、本種の回収数の96.6%を占めていた。ここでは例数が多いため、50km以上離れた回収302例のうち、秋放鳥秋回収の短期間記録（国内放鳥国内回収のみ)、秋放鳥冬回収の短期間記録を２枚の図に分けて示した。また北海道で捕獲されたアオジは、ほとんどが北海道内あるいはその周辺で繁殖していると考えられるため、北海道放鳥の回収記録を県別に図示した。

新放鳥数		388,090	羽
回収内訳	回収総数	移動回収	
国内放鳥国内回収	812	792	
国内放鳥外国回収	2	2	
外国放鳥国内回収	1	1	
外国放鳥外国回収			
計	815	795	
移動回収率		0.20	%
最長移動距離		2,017	km
最長回収期間		2,395	日

カッコ内は短期間回収

区　分		5km以上	50km以上
春放鳥 3-5月	春回収	3(0)	3(0)
	夏回収	1(1)	1(1)
	秋回収	9(3)	7(2)
	冬回収	0(0)	0(0)
	計	13(4)	11(3)
夏放鳥 6-8月	春回収	0(0)	0(0)
	夏回収	0(0)	0(0)
	秋回収	11(10)	2(2)
	冬回収	0(0)	0(0)
	計	11(10)	2(2)
秋放鳥 9-11月	春回収	79(18)	60(17)
	夏回収	9(0)	3(0)
	秋回収	625(508)	169(110)
	冬回収	55(35)	54(34)
	計	768(561)	286(161)
冬放鳥 12-2月	春回収	0(0)	0(0)
	夏回収	0(0)	0(0)
	秋回収	3(0)	3(0)
	冬回収	0(0)	0(0)
	計	3(0)	3(0)
合　計		795(575)	302(166)

国内放鳥国内回収（秋放鳥秋回収）

本種の50km以上離れた秋放鳥秋回収の記録は168例（他に国内放鳥外国回収が１例）あり、そのうちの110例（65.1％）が同一シーズン内の短期間回収であった。

北海道東部で放鳥され本州以南で短期間に回収された63例のうち、59例は太平洋側の青森県から和歌山県にかけてからの記録で、日本海側からは新潟県･富山県･滋賀県からの各１例、他に長野県からの１例のみであった。また、北海道北部及び南西部で放鳥され本州以南で回収された31例では、18例が日本海側の山形県から熊本県にかけて、10例が太平洋側の岩手県から三重県にかけて、他３例は長野県（１例）・岐阜県（２例）からの記録であった。このように太平洋側ではそのまま南下する個体が多いが、日本海側では日本海に沿って南下する個体だけでなく、関東以南の太平洋側へ移動する個体も少なくないことから、日本海側から太平洋側へ通過するコースのあることが示唆された。

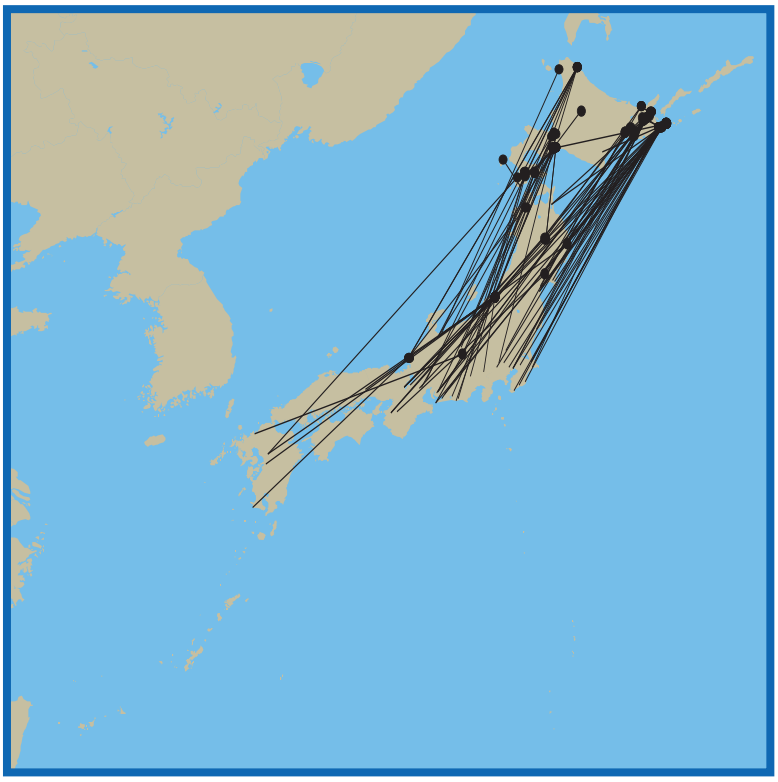


図3.55a　アオジ *Emberiza spodocephala* の秋放鳥秋回収（短期間回収）

国内･外国放鳥国内回収（秋放鳥冬回収）

本種の50km以上離れた秋放鳥冬回収の記録は54例あり、そのうち34例が短期間回収であった。北海道で放鳥された個体は秋放鳥秋回収と同様の傾向を示し、北海道東部で放鳥された個体のほとんどは太平洋側、特に関東地方（17例のうち11例）で越冬していると考えられ、一部は中国・四国・九州地方でも越冬していた。また北海道北部及び南西部で放鳥された個体は関東から九州にかけて回収されていた。特に長野県→三重県・新潟県→大阪府の記録は本州中部における縦断コースを示唆する記録であると考えられた。

外国放鳥の１例はサハリン南部からの記録で、放鳥から３ケ月後に鹿児島県で回収されたものである。

図3.55b　アオジ *Emberiza spodocephala* の秋放鳥冬回収（短期間回収）

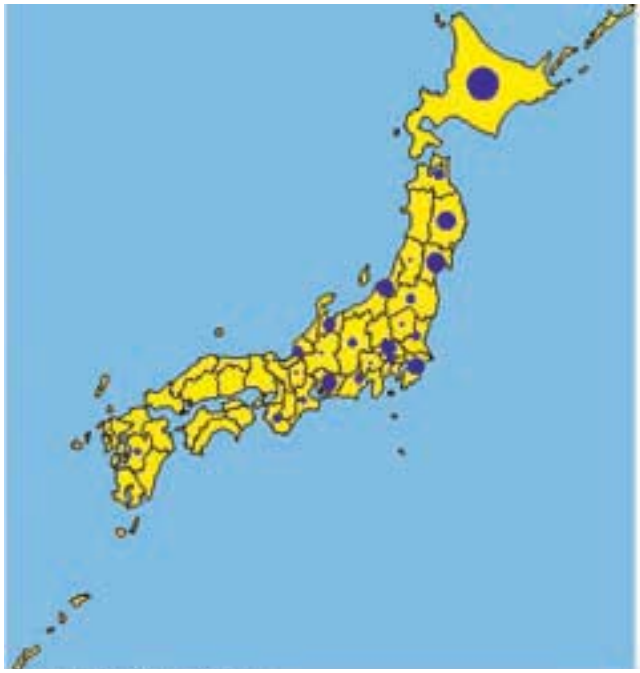
北海道放鳥県別回収（北海道放鳥）

日本で観察されるアオジの亜種 *E. s. personata* の繁殖地として知られているのは、北海道・中部以北の本州・サハリン・南千島である。したがって、北海道で放鳥される本亜種のほとんどは北海道およびその周辺で繁殖していると考えられる。そこで、これら北海道放鳥の回収記録を季節別に区分し、それを県別の例数として図に示した。

春の移動の時期には中部以北で、秋の移動の時期には近畿以北（熊本で２例あり）でのみ回収が得られている。一方、越冬期と考えられる12～２月の間の回収は、ほとんどが関東以西からであった。逆に繁殖期と考えられる６～８月の間の回収は、サハリンで回収されたほかはただ１例山梨県からのものであった。この個体は1981年10月に北海道中標津町で放鳥され、1986年８月に山梨県山中湖村において回収されたが、放鳥時の年齢･性が不明であるため、繁殖地を変えたものか、北海道で生まれて山梨で繁殖したかは不明である。

春の県別回収（35例）（３－５月）

夏の県別回収（２例）（６－８月）



秋の県別回収（123例）（９－11月）

冬の県別回収（36例）（12－２月）

図3.55c　アオジ *Emberiza spodocephala* の北海道放鳥県別回収